もったいない・おかげさま・ほどほどに、が環境と人間を育てる

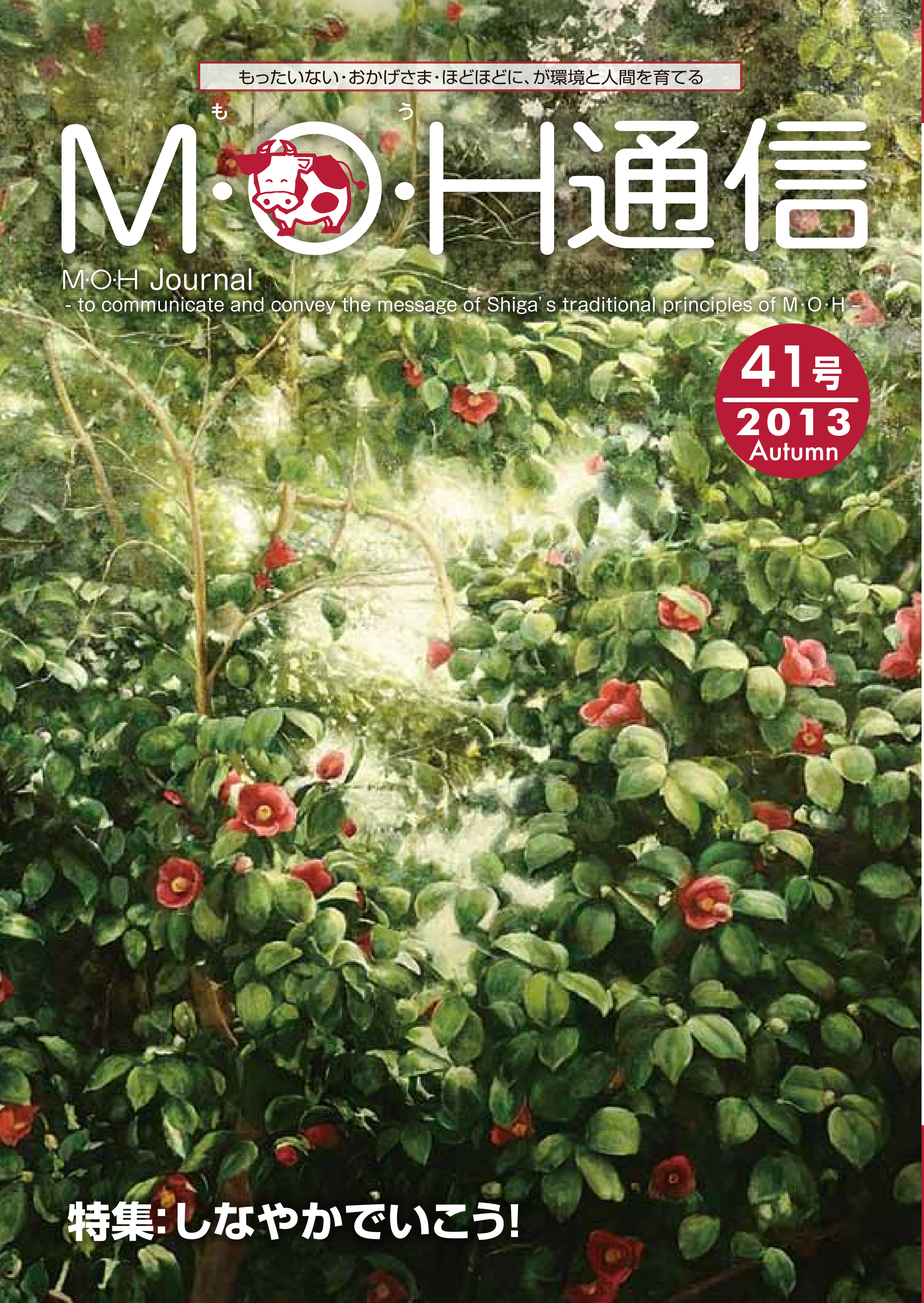
M·O·H通信

M·O·H Journal

- to communicate and convey the message of Shiga's traditional principles of M·O·H -

41号

2013 Autumn



特集:しなやかでいこう!

art gallery

Vol.41
2013 Autumn

自然の中に入った時、光や影が作り出す紋様を感じたままカメラのフレームの中に切り取る。それをモノクロの世界で表現しております（平田 尚加）

●ひらた なおか=1968年滋賀県生まれ。京都精華大学美術学部立体造形卒業。東京カブラギスタジオ、スタジオパークにて広告写真を学ぶ。FINLANDアートandデザイン大学留学。帰国後、滋賀にてフリーランスカメラマンをしながら作家活動をする。

厚すぎず、薄すぎず、手に持ってここちよい具合というものは、白磁・青磁の生命線と考えています。そしてフォルム・色合いを大切にしながら焼き物作りをしています（河合 正光）

[光工房ギャラリー]
〒520-0501　滋賀県大津市北小松1482-9
TEL/FAX.077-596-0604
MAIL:masamitu@nike.eonet.ne.jp
営業時間:10:00～17:00（不定休 要TEL）
贈答品等 相談に応じます。

●かわい まさみつ=1959年京都府生まれ。1985年、京都炭山の伝統工芸師「今橋貴古」に師事し、日本画家 権貴玉に絵を学ぶ。1997年大津にて独立。2000年高島屋京都店工芸ギャラリーにて個展（以降年1回開催）など、ギャラリー等で個展を開く。

「M·O·H」のマーク=牛

牛は環境の象徴ともいえます。牛糞はメタンガスになり、肥料にもなります。大地を作り、食物を育て、生物を養います。私たちは命の源ともいえる、牛を「MOH」のマークとし、循環型社会の象徴とします。

★ M·O·H通信の役割 ★

持続可能で豊かな循環型社会を築く社会人の意識を向上するためMOH通信は情報を発信し交流を続けます

M →循環　もったいない　他の生命を奪って得たものを使わせて頂く

O →共生　おかげさま　人は一人では生きられない、環境によって生かされている

H →抑制　ほどほどに　欲はほどほどに､良き環境を作り上げるために

contents

目 次

特集「しなやかでいこう！」

M・O・H巻頭言
自己と対立する「自己矛盾」とどう共生するか　森　建司 …… 4

M・O・Hな人　水口町編
“好き” が仕事に！ 正子さんの手作りおはぎとお漬け物　宿谷 正子 …… 5

① M・O・H対談
“しなやかでスマートな経済” のためのレシピ
花田 眞理子 & 森　建司…… 9

② 寄稿　～人と自然とのつながりを大切にする豊かな社会に向けて～
GNHって何？　草郷 孝好 …… 20

③ 寄稿
ブータン王国のGNHとレジリアンス　野坂 弦司…… 25

④ 寄稿
「和える」を会社にした女　矢島 里佳 …… 34

⑤M・O・H レポート
手作りミニ太陽光発電ワークショップ&
これからの新しい暮らしを考える集い参加しました！　…… 41

⑥M・O・H レポート
幻の銘茶、政所茶栽培に県大生が茶（チャ）レンジ！　山形 蓮 …… 44

野洲ウォーク　NPO法人環人ネット …… 48

漫画
山暮らし子育て日記　オノ ミユキ …… 53

愛する風景
み仏の森　畑 裕子 …… 55

里のお話
鴨頭草　三山 元暎 …… 57

本の紹介 …… 58

インターナショナルメッセージ ―独逸
しなやか?　原 修子 …… 59

第7回 M・O・Hせんりゅうコンテスト 2013
…… 60

講演日記 …… 61

太陽生命だより
「太陽生命くつきの森林」元気な森林づくり進行中!
…… 63

M・O・Hせんりゅう ……64

なでしこファーマーズ「なでしこ滋賀ネット」
食hana咲かそうよ …… 65

イベント紹介
第3回よばれやんせ湖北 …… 66

〈表紙作品〉

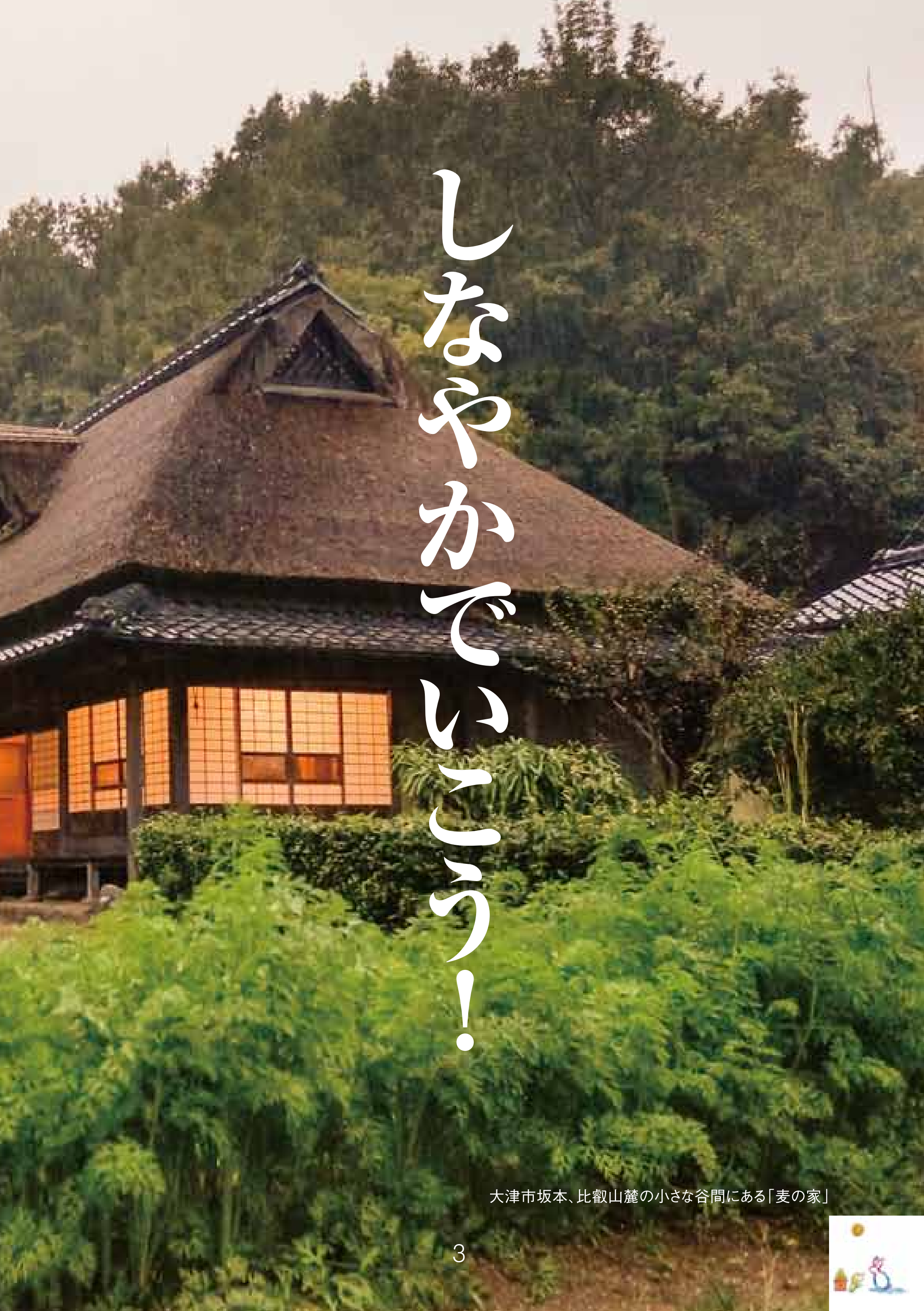
無我夢中

塩賀 史子

●しおがふみこ＝1972年滋賀県生まれ。1995年京都精華大学美術学部造形学科洋画専攻卒業。滋賀県在住。私は風景の中の光と影の交錯を描くことで、ありふれたものの中に隠されている普遍性と、一瞬に内包されている永遠の輝きを表現することを目指しています。

パラパラマンガをお楽しみください

しなやかでいこう!



大津市坂本、比叡山麓の小さな谷間にある「麦の家」

共生とは「矛盾との共生」である。「矛盾」攻める武器と守る盾が同居する。

自己の存在は「生と死」の自己矛盾で成り立っている。これは厳しい「存在の掟」だ。未来に夢を見出だし、希望をもって生きる。愛する人の幸せを思い、自動車を買い、家を建てる。そして借金を返し終わって、ようやく夢の実現に漕ぎつける。しかし、その間、人は確実に死へ向かって進んでいる。古希を過ぎて振り返るとそのスピードは驀進する速さだ。夢を実現する時、愛する人はすでに亡くなっているかも知れない。自分も「死」が主体になって「生」は微かに片隅で生きている。かりにそのことを自覚しても、「死」が「生」を止揚するまでは「生」をたくましく生きる。そんな人生でありたいと願う時「生と死」の共生の倫理すなわち、自己の死生観をもつことになる。

自己矛盾には「善と悪」がある。「利他と利己」と言ってもいい。生きていくためには、「利他」だけでは生きていけない。「利己」があって「利他」は存在する。言葉をかえせば、悪があって善が存在するのだ。

自己と対立する「自己矛盾」とどう共生するか

森　建司

その場合の判断基準をどこに置くか。仮に一本の直線を引き左端を「善」とし右端を「悪」として、行動の基準をどの位置に置くか、それを決めるのがその人の倫理観である。

この世に存在するものはすべて他者の犠牲の上で成り立っている。われわれ人類はもとよりすべての生物は、他の生物の命をとって、生きるための条件を得ているのだ。

自分が生きるためには、他を殺し続けなればならない。これはこの世に存在するものの宿命である。それ故にこそ他の生物の生存を守り続けなければならない。人間社会においても同じことだ。社会環境の中で共生を中心に考え行動してこそ、持続可能社会は生まれるのだ。

自己矛盾の倫理観で、判断基準の居場所を選び、そこに固定して生きていくことは出来ない。時には優れた行為であっても、一方的であっては自滅してしまう。そこに共生の倫理の判断が求められるのだ。

各自がその倫理観をもたないと「共生社会（持続可能社会）」には生きられない。

M・O・H
な人
水口町編

息がぴったりの正子さん㊧と巳智代さん㊨

“好き”が仕事に!
正子さんの手作りおはぎとお漬け物

宿谷 正子
おはぎ、漬け物販売「萩のやどや」

無添加で斬新でおいしい！手作りのおはぎと漬け物が滋賀県甲賀市水口町春日の農産物直売所『かすがの郷』で大人気となっています。胡麻や青のりといった、ちょっぴり珍しいおはぎに、伝統野菜『日の菜』の梅酒漬けなど、地産地消の加工品を生み出す宿谷正子さんは、“作ること”がとてもだいすき。妹の巳智代さんとともに、工房「萩のやどや」で忙しい毎日を過ごす正子さんにお話を伺いました。

■工房「萩のやどや」（水口町）
■2013年7月10日

営農元組合長のひと声

『かすがの郷』がオープンしたのは、今から3年前の2010年7月のこと。定年を過ぎた〝お父さん〟たちで構成される『農事組合法人春日営農組合』が、地元農産物の販売のため立ち上げました。

「手作りで添加物も何も入っていないのが素朴でいい。おはぎと漬け物を出荷してくれへんか?」

当時からよく人におすそ分けをしていた正子さんの味に惚れ込み、営農組合長の萩本(はぎもと)さんがラブコールを送ったのがきっかけでした。

現在、『かすがの郷』、『JAグリーン花野果市(はなやかいち)』、『花野果市石部店』におはぎと漬け物を、『花野果市貴生川店』に漬け物を出荷中です。

おはぎの味はあんこ、きな粉、胡麻、青のりの4種で、6個入り450円、3個入り230円、2個入り食べきりミニサイズ100円。春日産の羽二重もちを使用したおはぎは食感がモチモチしており、添加物は使用していません。安心安全で素材な味が楽しめます。胡麻はご主人・利男さんのお気に入り、正子さんは青のりがお気に入り。

漬け物は、〝豊富な品揃え〟が好評です。売れ筋商品の『日の菜のあっさり漬け』をはじめ、カボチャやピーマン、ゴーヤといった季節野菜も、サラダ感覚で食せます。新商品は『日の菜の梅酒漬け』です。地元の農家や親戚から届く〝野菜の鮮度〟が自慢です。真空パック一袋で250円という手頃な価格設定となっています。これこそ〝地産〟品といえるでしょう。

なぜ、おはぎ?・なぜ、漬け物?

もともとおはぎ作りが好きで、春と秋のお彼岸にはたくさん作ってご近所や親戚に配っていました。定年を過ぎ、営農組合に務めるご主人の利男さんのために、作って届けていたおはぎが営農元組合長の目に留まりました。

「私が販売しようと思ったんじゃなくて、萩本さんから頼まれたのがきっかけなんですよ」

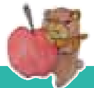
ご主人に届けられたおはぎを、萩本さんも一緒に味わっていたのかも知れません。

漬け物づくりも昔から好きだったそうですが、その原点は母・小いとさん(素敵なお名前!)にありました。

「母のお漬け物が好きで、母の味で大きくなりました。見よう見まねで作っては、いつも母に味を見てもらっていて。会食があれば漬け物を持って行きます。参加できない会食では、『正子さんが来れなくても漬け物は届けてね』なんて言われたり(笑)。漬け物を漬けるのが好きなので嬉しい」

「萩のやどや」

販売開始から2ヶ月、2010年9月には保健所から許可をもらい、自宅の調理場を工房『萩のやどや』と名付けました。萩には、『おはぎ』、工房を申請した9月の花である『萩』、この仕事のきっかけとなった営農元組合長『萩本さん』の3つの意味が込められています。『やどや』は『宿谷』を言い換えると読めることから。屋号からおはぎに対する愛情と、きっかけをくれた人への感謝を忘れないという正子さんの思いが伝わってきます。



おはぎとお漬け物の万有引力

正子さんの一日は朝3時半から始まります。4時には妹の巳智代さんが来て、二人で120個ほどのおはぎを作り上げます。7時には自らが商品を配達し、在庫をチェックしながら9時に帰宅。帰宅後は漬け物を漬ける作業、パック詰めの作業があり、忙しい毎日です。漬け物は野菜を切ってから漬けるのでひと手間もふた手間もかけられています。

今年の6月に巳智代さんご夫婦が鹿児島から引越ししてくるまで、一人で工房を切り盛りしていた正子さん。小いとさんの入院と巳智代さんの定年退職が重なり、巳智代さんご夫妻は、正子さんを手伝うため春日の地に住むことを決めました。

「妹が来てくれて本当に助かっています。今までは一人で90%しか出せない力も、二人でやれば200%の力!」

姉妹の息の合ったコンビネーションが魅力です。

アイディアいっぱい

知らない人からも「おいしかったです」という電話が入るほど人気のおはぎ。たまに売れ残ると店員さんが食べてくれ、味をお客さんに伝えてくれるそうです。

「残り物を店員さんが食べてくれるのもPRにつながるので、たまには残るのもいいかなぁって。たくさん残ると困るけど(笑)」

おはぎのパッケージラベルは、『かすがの郷』にアルバイトに来ていた学生が描いてくれました。ラベルは季節ごとに絵柄が変わります。丸く切られたラベルは、お客さんが中身を見やすいようにという心配りから生まれました。

夏野菜の新商品も生まれました。ピーマンのあっさり漬けとなすのからし漬け、生姜の甘酢漬けを細かく刻み、胡麻をまぜて食卓に出したところ、家族から「うまい!」と太鼓判をもらいました。商品化に伴い、付けた名前は『まさうま漬け』!なすとピーマンが採れる、季節限定の商品で、食べやすいと人気を集めています。

これこそ〝地消〟です。

正子さんのアイディアは留まることを知りません。これからの新商品も楽しみです。

元気な人が介護する暮らし

春日でも高齢者の一人暮らしや夫婦の二人暮らしが増えました。介護のあり方を考えなければならないと話す正子さん。夢は、年齢、性別関係なく、元気な人が、介護を必要とする人を支えていく暮らしの創造です。

「店頭に商品を並べるのもいいけれど、買い物に行けない人の家に惣菜なんかを売りに回って、生活に必要な物があれば代行で買い物をし、コミュニケーションをとりながら介護していきたいです」

調理師免許を持つ巳智代さんも大賛成で、栄養バランスの行き届いた弁当作りに意欲を示しています。

「インターネット販売でも物は買えるけど、私はやっぱり顔を見て、コミュニケーションをとりながら販売できる方法を選びたい」

地域コミュニティの中で、食・介護・

❶自慢のおはぎ。右手前から時計回りに、黒胡麻、白胡麻、あんこ、きな粉、青のり ❷丸いラベルは中が見やすい ❸アイディアが詰まっています ❹サラダや酢の物感覚で食べてみて ❺おひとついかが？ ❻ずらりと並ぶ漬け物

コミュニケーションの創造を担うことで、安心して暮らせるまちづくりのヒントが見えてくるかも知れません。忙しい毎日でも楽しんで取り組む正子さんと巳智代さんに元気をもらいました。

常に前向きに生きよう!!

宿谷正子

●しゅくたにまさこ＝1948年甲賀市水口町春日生まれ。2005年8月にパソコンインストラクターの資格を取得し9月よりパソコン教室開校。2010年7月、春日に新鮮野菜の直売所「かすがの郷」が開店し、おはぎ、漬け物を出荷。9月、自宅に工房「萩のやどや」として保健所の許可を取得し、おはぎ、漬け物作りを本格化する。定休日は毎週月曜日。

●農産物直売所『かすがの郷』
滋賀県甲賀市水口町春日2753
TEL：0748-60-8098
【営業時間】9：00～18：00

●JAグリーン花野果市
甲賀市水口町水口6111-1
TEL：0748-62-0711
【営業時間】9：00～18：00

●花野果市石部店
湖南市石部中央4丁目8-50（JA石部支所隣）
TEL：0748-77-2027
【営業時間】9：00～18：00

●対談

花田 眞理子
大阪産業大学大学院
人間環境学研究科 教授

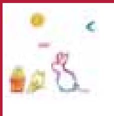
森 建司
循環型社会システム研究所 代表

〈 しなやかでいこう! 〉

"しなやかでスマートな経済"のためのレシピ

グローバリゼーションが進む現代社会において、経済合理性とコスト削減を追究するあまり切り捨てられてきた自然の美しさや四季の移ろい。これまで経済が評価できなかった、こうしたものの価値に目を向けることの大切さについて、そして短期的視点が生みだす問題について、経済学の花田眞理子さんに縦横に語っていただきました。大量消費のライフスタイルを脱して持続可能な社会へと変えていくための戦略とは? "タブー"が日本の未来を変える!?

■ブルーベリーフィールズ紀伊國屋 山のレストラン(大津市)
■2013年7月10日



市場価値では計れない大切なものに目を向ける

花田　「はたして経済成長は良いことなのか？」という問いは『M・O・H通信』の対談で繰り返し出てくるテーマですよね。

森　はい、弊誌を通してずっと訴えていることです。

花田　39号に掲載されていた枝廣淳子さんとの座談会で「幸せとは何か」という話が出ていましたね。経済成長という言葉ですべての人が黙らされてしまう。ところが成長しても豊かになったという実感がもてない。それは国際比較調査で数字としても表れています。経済成長で豊かさをめざしてきたけれども実は豊かな暮らしになっていないと気づいたら、そこで少し立ち止まる必要があると私も考えています。

　今日、「ブルーベリーフィールズ紀伊國屋」に初めて来ましたが、窓からの眺めがすばらしいですね！　こうした自然の眺めは理屈抜きに気持ちがよい。けれども、その感覚は市場価値として「いくらですか？」と問われてもカウントできないんですよね。カウントできないということは、使ってそれを減らしてしまっても、その分のお金を払わなくていいということになってしまう…。

伊香立から琵琶湖を眺む。眼下にはブルーベリーが収穫を待つ

森　そうした経済合理性が今の経済界の欠点ですね。

花田　はい。そうした価値を金銭的にカウントしてこなかったのが今までの「しなやかでない経済学」。そこで、本来は価値があるのにカウントされていなかったものを考慮に入れて、使い放題捨て放題の人が得してしまう社会の仕組みについて考え直してみようという動きが、少しずつですが世界的にでてきています。

森　その世界的な流れは具体的にどういう風に現れているんでしょうか？

花田　例えば水源の環境が荒れたために、ニューヨークの水道水の水質がものすごく悪化したことがありました。そこで、従来のように水源に巨大な浄水場を造るのか、水源であるキャッツキルの森林を整備して水をきれいにするのか、議論になりました。キャッツキルはニューヨークの人がハイキングに行くところ

なのですが、ハイキングに行ったときに木々が風にサワサワそよいでいるのと、殺風景な建物がドンとあるのとどちらがいいか考えると、やっぱりサワサワの方がいい。そこで水源の森林を守ることにしたら、結局、浄水場を造るよりもずっとコストが安く済んだそうです。浄水場は継続的に毎年莫大な維持費がかかります。自然を整備するコストももちろんかかるけれども浄水場建設費に比べればたいしたことはない。しかもあとは自然の循環で水質を維持していくので、水道代の値上げ幅もほんの少しで済んだそうです。そう考えると自然の恩恵の偉大な価値が見えてきますよね。

　ここで、森さんが以前話されていた〝ものさし〟の話を思い出しました。

森　だますような商売をする相手は違うものさしをもっているから、自分と同じものさしをもっている人とだけ付き合えと父親に言われたという話ですね。

「ものさしを変えれば、連鎖が始まり、商売の芽が…」(花田氏㊨)

花田　お商売だと同じものさしの人を選べばいいのですが、社会全体について考える場合は、違うものさしの人に「こっちのものさしで考えてみたらどうですか?」と提言していかなくてはいけない。でも、違うものさしの人に説明するのはものすごくむずかしい。そこで、ニューヨークの水道の話のように「自然を大切にした方が安上がりですよ」という言い方をすれば通じるのなら、それでいいんじゃないかと私は思うのです。

森　ものさしの違う相手に対して、そういう説明の仕方もあるわけですね。

エネルギー問題の根源にある経済・経営の短期的視点

森　しかし、経済界では「経済成長が何よりも大事だから原子力発電所を止めておくなんてとんでもない」と考える人が多くて、なかなか私たちの話に耳を貸してくれませんが…。

花田　現在の、原発を動かすかどうかのの議論は「安全か経済負担か」つまり「安全のために原発を動かさなければ、経済のダメージや国民負担が大きくなる」という二者択一になっているのですが、私は実は経済全体の負担増にはならないと考えています。原発以外のエネルギー源として例えば再生可能エネルギーに本気で取り組めば、技術開発が進み、新しい市場がつくられ、そこに雇用

「ライフスタイルの変換を」（森氏㊧）

が生まれます。もちろん既存の電力関連市場は縮小しますが、経済全体から見れば、その縮小を補って余りある大きな新市場の拡大が見込まれる。つまり「安全も経済も」なのです。ところが今、中途半端に「原発を動かしてもいい」ということにすると、背水の陣で技術に投資はしませんから新しい技術が出てこなくなる。せっかく安全で新しいエネルギー関連市場ができるチャンスなのに、そういう風に考えられない。短期的に産業構造を変えるのはたいへんだから、今お金を払いたくないから、ということで結局、再生可能エネルギーに本腰入れて取り組まないことになってしまう。

　これはたぶん今の「しなやかでない経済」の考え方そのものだと思います。経済の現状写真をパチッと撮って、撮ったときの状態を前提としてものを考えようとする。だから話がおかしくなってしまうのです。現実には、何かが一つ変われば、いろんなことが連鎖して変わっていく動画で考えるべきなのですが。

森　39号の座談会にも登場していただいた滋賀県琵琶湖環境科学研究センター長の内藤正明先生は「現状の問題を科学技術で乗り越えると、さらなる問題を引き起こしてしまう。だからエネルギーの問題においても、エネルギーを使わないライフスタイルに換えていくしか道はない」とおっしゃっています。新しいエネルギー源を開発するより、エネルギーを使わない暮らし方を考えた方がよくないでしょうか？

花田　もちろんエネルギーを使わない社会が理想的です。特に暮らしの中でも、また事業活動をやっていく中でもなるべく使わないようにするのは非常に大切なことだと思います。しかし、さきほど申し上げたように、ものさしが違う人にも話をしていかなければいけない。そのときに真正面から「使うのをやめましょう」「減らしましょう」と言うと「経済成長を否定している」と思われて、話も聞いてもらえないんですよ。

森　そうです。経済団体の会合でこういう自然や農業関連のアグリビジネスについての話をしても、情熱のある若者は来るけれど企業経営者は全然来ない。

花田　それだったら「経済は今までみたいなやり方では先がない。こっちの方向に行ったら商売の芽がありますよ」と説明して受け入れてもらったほうがいい。これは一つの戦略なんです。

森　弊社でも〝第二創業〟、つまり新規事業を開拓していかなくてはいけないという話がでています。そこで、会社の役員会で「これからはアグリビジネスも考えていかなければ」と提案するのですが「それよりも、もっと新製品はないか。科学でできた新しい商材を探そう」ということになってしまいます。

花田　その根本には時間軸との関係があると思います。企業活動では必ず「今期の利益を上げること」が必要になってきます。株式会社ですと、株主が声高に「今期の儲けはどうだ?」と言うんですね。本来、株主というのはその会社の事業活動の応援団ですから、目先のことで一喜一憂しないもの。その企業の事業活動における方針に対して「そのやり方では長期的にうまくいきませんよ」と意見するのが株主だと思います。ところが、今の株主は今期の業績をよくして売り抜けることばかり考えるので、視点がすごく短期的なんです。ですから経営者も、長期的にプラスになるように考えていかないといけないのはわかっていても、そうはできないのだと思います。

森　短期的視点に立った経営になってしまうところに問題があるわけですね。

花田　これに対して、中小企業は小回りがきいてベンチャー的なこともできますから、環境系ビジネスに非常にフィットします。それに加えて、中小企業は比較的オーナー経営が多いので、いま儲かることよりも子どもや孫の代まで続くことを考える。そのため長期的視点を持ちやすいと思います。

森　確かに、われわれ中小企業は事業の継続が第一。それに働く人も家族の一員だという思いがあって、経営者も社員も家族の幸せのために働くんですよね。

地産地消と地域通貨で〝自立〟を目指す

森　今まで経済学は生産者と消費者・流通業者を分けて分析をしてきましたが、実際には消費者はみな生産者でもあるわけで、生産者と消費者・流通業者はみな一体なはず。そこで地産地消、地域の商品を買うように消費者の意識を変えていきたいと考えています。その啓蒙活動として、弊誌が生産者消費者交流会などをバックアップしています。

花田　それは本当にすばらしいですね。

森　「消費者が育てる地域産品」を目指して生産者と消費者の交流会「よばれやんせ湖北」を年に1回開催していて、今秋は長浜バイオ大学と共催の予定です。

　地産地消が実現できても、国家経済が世界の第何位ということにはまったく関係しませんが、今後は地域産業を核とした地域通貨などについても真剣に考えていくべきでしょうね。仮に銀行が破綻しても、地域通貨でやっていればご飯は食べることができるわけですから。

花田　そうです。だから〝自立〟、つまり自分たちの地域の中でお金を回すことがすごく大切なんです。お金のあり方について、私たちはこのあたりでもう一度考えた方がいいと思います。経済活性化のためにどうしてもお金を使わせたいのであれば、すごくいいやり方がありますよ。自治体が地域通貨を発行する。そのお金は使わないで持っていると、使うときに1か月につき1%逆金利がついてしまうという仕組みです。

森　逆金利!?

花田　そうしたら、みんなお金をバンバン使う（笑）。しかも、そのお金はその地域でしか通用しませんから、地域の中で回る。実際、世界恐慌直後の1930年代にオーストリアのヴェルグルという町でこんな施策が実施されたそうです。失業対策として公共事業を行い、その賃金の半額を地域通貨で支払った。早く使わないと損になる仕組みだったため、商品の売買が活発になり税収も増加、地域経済が見事に立ち直ったということです。

森　おもしろい発想ですね。

花田　現在もスイスでは中小企業の協同組合が独自の通貨で融資を行う仕組みがあるそうです。

「スタイリッシュにエコ」アメリカのスーパー事情

花田　話は変わりますが、最近アメリカへ行って驚いたことが二つありました。その一つは、アメリカで最大のスーパーマーケット・チェーンであるウォルマート。ここは、使用エネルギーの100％を再生可能エネルギーにする、廃棄物の排出をゼロにする、人々の営みと環境を持続させる商品を販売する、という3つの宣言を2005年に発表しました。あの規模の大企業には、確かにすごい影響力があるんです。その宣言の一環として店頭の冷凍冷蔵ケースの照明用として、その頃はまだなかったLEDシステムの開発に1700万ドル投資してGEに作ってもらった。そして500以上のお店に導入したら、年間の電気代がぐっと下がったため5年で元が取れたそうです。さらにすごいのは、GEがLEDを大量に作って売った結果、LEDの市場価格そのものが下がったということです。今、アメリカのウォルマートでは、バイヤーがそのスコアカードの評価で商品の仕入れを決めることで、メーカーやサプライヤーの努力を促す事業を試行中ですが、さらにその対象を消費者にまで広げようと、商品の環境影響の大きさが消費者に一目で分かるような「持続可能性指標」の開発に、いろいろな国で取り組んでいるようです。大きい力を持っている企業には、ぜひこういう風に動いてほしいですね。

　もう一つ、アメリカのホールフーズという高級スーパーですが、生産地から7時間以内で搬入できる商品を〝ローカル〟と表示して、新鮮さや、生産過程に目配りできる地域産品のメリットを前面に打ちだすとともに、店の〝ローカルポリシー〟をアピールしています。この店のエコバッグはおしゃれでメッセージ性も強く、とても素敵なのですが、この店ではほとんどの買い物客がエコバッグを持ってきている。アメリカでも、エコバッグを持っていくのがスタイリッシュで

アメリカの高級スーパー「ホールフーズ」のエコバック

当たり前だというライフスタイルが広がっていることを感じました。

森　大量生産大量消費のアメリカで、そうした動きがあるのは驚きです。

〝しきたり〟と〝タブー〟

花田　今の経済システムではどうしても短期的に利益を得ることが良しとされてしまうので、事業活動も短期的視点に立ってしまいがちです。しかし、そもそも「経済成長は疑いもなく良いことだ」という発想自体を疑ってみる必要がありそうです。これが当たり前だという考えにとらわれているのではないかと私は思います。とらわれるというのは〝しなやか〟ではない。この〝とらわれ〟からの解放はとても大切なことだと考えています。

森　ところが、今の経済合理性ではコストを下げるために余分なものをみんな否定する。それが日本のライフスタイルにも入ってきて、最近ではお葬式もしなくなってきたそうですよ。長浜バイオ大学で行われた木津川計さんの講演「葬式と結婚式を誰が変えたのか」によると、最近の人は宗教は要らない、死んだらすぐ焼き場に持って行って遺骨を粉砕して撒くというんです。経済合理性からすると、それでいいのだとか…。花田先生はそういう風潮をどう考えられますか？

花田　お葬式というのは祖先を考え子孫を考えるきっかけになりますよね。お葬式をしない、お墓参りもしない…そうすると、先祖や子孫のことを考えるきっかけがなくなる。そういう人たちにとっては、自分が生きている間がよければそれでいい、2050年のことなんかどうでもいい、となってしまいます。

「断つ」から生まれる連帯感（花田氏）

森　おっしゃる通りです。

花田　儀式や地域コミュニティにおける〝しきたり〟を通じて、それぞれが〝つながり〟を確認する。しきたりには地域の歴史や風土からもたらされた「意味」がある。だから大切にしなくてはいけないと思います。それと、地域の行事には季節とつながりがあって、季節とつながりがあるということは自然に耳を傾けることになる。現代人は自然に耳を傾けなくても済むような暮らしをしているからこそ、こうした季節の行事が必要だと思います。

もう一つ大切な地域の知恵として、例えば「この期間は獲ってはいけない」とか「この期間は断食しましょう」といった〝タブー〟があると思います。

森　どういう意味でのタブーなのか、もう少しお話しいただけませんか？

花田　例えば夏至や冬至の頃の夜、2時間ほど電気を消してキャンドルを囲んで時間を過ごしましょうというキャンドルナイト。あれはその時間には照明の電気を使わないという「断エネルギー」「断炭素」に取り組む、つまり同じタブーを

守っている仲間ということで連帯感がうまれていると思います。

　昔はいろいろな決まり事がタブーとしてあったと思うんですよね。長い経験から、魚を獲れるだけ獲っていたらやがて魚がいなくなり漁ができなくなってしまう。だから「この期間は獲るのを止めましょう」というタブーが生まれ、それをみんなが守ったわけです。ところが今は「お金を払えば何をしてもいいじゃないか」ということになっている。それはものすごく傲慢で浅はかな考えです。

　お金なんて人間が考えた工夫にすぎないのですよ。例えばニシンを獲って、そのニシンと何かを交換したい場合、物々交換だと、ニシンを欲しい人としか交換できない。でも、お金を仲立ちにすれば、ニシンは欲しくない人が持っているものでも買うことができる。そういう風に工夫して生み出されたのがお金であって、お金は手段にすぎません。ところが、それが目的になってしまっている！

森　そうなんですよ！　金融工学などはそれ自体がビジネスになっている。それは誤りだと思います。

「余分」が否定されてるんですよ（森氏）

花田　私も誤りだと思います。小賢（こざか）しいリスク分散の錬金術の結果、リーマンショックは真面目に普通に生きている人たちの暮らしや経済を直撃したんですよ。だから、「無から有を生む」金融工学を考えるくらいなら、「有から無を生む」タブーを考えた方がいいと思うのです。

「和敬清寂（わけいせいじゃく）」の心を育む

花田　先ほど森さんがおっしゃったように、生産者も消費者もみんな〝生活者〟なんですよね。ところが、グローバリゼーションだと経済が大きくなり過ぎて、生産者と消費者があまりにも離れてしまう。世界のどこかで釣られたマグロが冷凍されて空輸されてくる。そうなると生産者にも生産地にも思いを馳せることはとてもできません。森さんは消費者が生産者を育てるとおっしゃいましたが、同じように生産者が消費者を育てるという面もとても大切だと思います。生産者は市場の中で情報を透明化する、できるだけ生産情報をわかりやすい形で届ける。それを生活者の側が受け止めるためには、小さいときからの教育も必要だと思います。そうした情報が理解できる能力を「環境リテラシー」というのですが、この環境リテラシーとならんでもう一つ大切なのが〝価値観〟の教育です。

森　具体的にどういう価値観を子どもたちに伝えていけばいいとお考えですか？

花田　ずいぶん前のことですが、子どもが通っていた幼稚園の行事で比叡山延暦寺の山田恵諦天台座主からうかがったお話が今でも印象に残って

います。私たち人間はがんばって生きてもたかだか100年ぐらい。その中で人間はちょこちょこ動いているのだけれども、もっと〝大きな存在〟…それはひょっとすると神様かもしれませんし仏様かもしれませんし、あるいは地元の自然そのものや、産土神みたいな方かもしれませんが、そういう人間よりもっと〝大きな存在〟があるという考え方はとても大切で、それを小さな子どものときから教えていくべきだと山田座主はおっしゃったんです。この考え方は『M・O・H通信』の「おかげさま」に通じるのではないかと思います。

森　確かにそうですね。

花田　そこで、私は「和敬清寂」の価値観を日本の子どもたちに教えていけたらと考えています。

森　「和敬清寂」というと?

花田　私なりの解釈ですけれど、「和」はみんなで一緒に、自然のことも含めての共生。「敬」は先ほど申しました〝大きな存在〟に敬意を払い、また自分と違うものも否定せず敬意を払うこと。「清」はキラキラした物質文明の価値やお金では説明しきれないような感覚。例えば「この眺めはすばらしいな」と感じたり、森に行って気持ちが良い時間を過ごすことの清々しさ。また、ふだん人間は昨日と同じ今日があり今日と同じ明日があるように思って漫然と暮らしていますが、自然は一瞬も同じではない。無常だから大切にしなくてはいけないという思い、あるいは四季の移ろいに敏感になるといった意味が「寂」には込められているように思います。そういう感性を小さいときから幼児教育で伝えたいのです。

森　なるほど。英語教育などを必須にするより、日本人としてのものの見方を教えようということですね。

花田　もちろん読み書きそろばんは絶対に必要です。日本の識字率が世界的に見てきわめて高いことは国力の源になっていると思いますから。一方で、そうした〝技術〟だけでなく〝価値観〟を教えていくことで、日本にも明るい未来があるのではないかと思うのです。

森　「足るを知る」ことはとても大切で、そういう気持ちさえしっかり持っていれば、経済が縮小して生活スタイルが変わっても十分やっていけると思います。

花田　経済を伸ばすことばかり考えていても、確実に人口は減っていくのですからね。

強い国から賢い国へ

花田　東日本の震災と原発事故ですが、あれだけの犠牲を払って、私たちはいろいろなことを教えられ、学ばせていただいたと思います。あれで覚醒しなかったら本当に罰当たりなドアホだと思います。すみません…意識的に関東人にとって最大級の悪い言葉を使いました。

森　おっしゃる通りですよ。

花田　東北の人たちがなぜあんな目に遭わなければいけなかったのか。震災も原発事故もその被害をカバーしたり、命も含めて失われたものを取り戻すなんていうことはできるわけがありません。でも、せめてそこから何かを学べばあの悲劇にも少しは意味があったと思うのですが、また震災前と同じような話がでてきて…いったいどうなっているんだろうと思います。

森　何を学ぶべきだと？

花田　「自立」と「共生」だと思います。震災後に注目されるようになった「レジリアンス」、つまり外からの衝撃に対して強いかどうかは地域として自立できているかどうかにかかっているんですね。震災後、企業も非常時・災害時にどれだけ自立できるか、一時避難者をどれだけ受け入れられるかなどを考えて非常電源や備蓄を整え始めました。先ほどのウォルマートの例もそうですが、大企業が自分たちのできることをやっていくのはいいことだと思います。

　それから、自立には「身の丈に合わせる」考え方が大切だと考えています。

森　『M・O・H通信』の「ほどほどに」の精神に通じますね。

花田　はい。最近よくいわれているのが「強い国から賢い国へ」。日本は資源がすごく少ないですし、食料の自給率も4割くらいですから、6割は外国に頼るような生活の仕方をしている。「持たざる国」の日本が強い国を目指すのは無理がある。だから「賢い国」になることがとても大切。「賢い」を「スマート」と表現しますが、それはスマートシティなどのように最新の技術をどんどん取り入れてそれに頼るだけではなくて、非常時にも備えたゆとりある暮らし方こそが日本らしい賢さ、スマートだと思います。

　もう一つ大切なのが「共生」。違いを認め合い、補い合って高め合う。誰がどう考えてもその方向へ行くしかありません。

森　グローバルといっても地球を一つの国にするのは不可能ですからね。

花田　そうです。他国と共生しながら、あるいは他の文化に敬意を表しながら、日本に暮らす人たちが幸せな国を目指していくためには不慮の出来事にも強い「しなやかな経済」のあり方が重要になると思います。

　そもそも今いわれているグローバリゼーションは、大手ファストフードのチェーン店に代表されるアメリカ型のグローバリゼーションですよね。そこでは世界中で均一にした方が効率がいいわけですが、ではそのために何を切り捨ててきたかというと、例えば食文化のような、地域の独自性に根ざした文化だったのです。食文化はその土地の気候風土や自然条件などと折り合いをつけながら築かれてきたもの。しかし、いちいちそんなことに対応していくのは効率が悪いから全部切り捨てる。そういう意味で失ったものは大きいですね。

森　地場産品のそれぞれに物語があったり歴史があったり文化があったりするのに、コストがかかるからと全部切って大量生産で同じものを作ってしまう…。

花田　そうなんです。グローバリゼーションだと大きくなり過ぎて、どんな思いで人が作ったものかがわからない、だからストーリーが見えない。例えば、今このテーブルに飾られているお花やグラスの水に浮かんだハーブは、たぶん朝摘んでこられたのでしょう。

朝摘みのハーブが心を癒す

ここからも顧客に対するお店の思いが伝わってきますよね。でもこんな手間や時間は、ファストフード店では無駄で余計だとみなされます。その地域で培われた歴史や文化、地域の知恵は一回失ったら取り戻すのがすごくむずかしいのですけれど。

森　やはり、これからは経済も暮らし方も小さくしていかないといけないということですね。

花田　ところが「小さくする」というと、どうしても後ろ向きな感じに受けとられてしまいます。でもこれはむしろ前向きな進歩なのだと私は言いたい。みんながそういうことに気づいて「スマートな国」「スマートな経済」の先駆者として、日本が世界中のお手本になっていくことを願っています。

森　今後の日本について今までとは違った角度から改めて考える、いい機会になりました。貴重なご提言をありがとうございました。

「スマートな国でスマートな経済を」（花田氏㊧、森氏㊨）

和敬清寂
花田眞理子

●はなだ まりこ=大阪産業大学大学院人間環境学研究科教授。さまざまな経済主体を、環境配慮に向けて動かすには?キーワードは「お得で楽しくスマートに」。経済学で仕組みを考え、行動科学で仕掛けながら、いきいきとした社会の実現をめざして、学生とともに楽しく活動しています。

勇気凜々
心の壁を打ち破れ
森建司

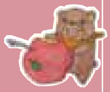
●もり けんじ=1936年滋賀生まれ。滋賀県立長浜北高校卒業。新江州（株）取締役会長。滋賀経済同友会特別幹事、滋賀経済産業協会相談役など。〈著書〉『吃音はなおる』遊タイム出版、『循環型社会入門』新風舎、『中小企業にしかできない持続可能型社会の企業経営』サンライズ出版、『中小企業相談センター事件簿』サンライズ出版。

峠の仏塔、ルンタ(写真は、松田宗一、奥村彰二、ブータンミュージアム提供)

GNHって何?
～人と自然とのつながりを大切にする豊かな社会に向けて～

草郷 孝好
関西大学社会学部教授

ブータンは、九州ほどの大きさで、人口は約72万人(2012年)という南アジアの小国だが、世界中のセレブがあこがれ、国連などの国際会議ではブータン政治家の講演が感動を呼び、"幸福"を世界中の人々の人権に組み入れようと、キャンペーンを展開している。この存在感には目を見張るものがある。ブータンの持つ魅力は、ブータンが国是として掲げるGNH(国民総幸福)にある。そこで、GNHについて紹介し、日本への応用可能性について論じてみたい。



GNHの起源

1つのデータがある。2005年にブータン政府が実施したセンサス（国勢調査）で、「あなたは、幸せですか?」という質問がなされ、「幸せです」「まあ幸せです」を選択回答した人の数を足し合わせると、何と95%以上に達した。これだけ多くの国民が幸せであると感じているブータンは、GNH（Gross National Happiness グロス・ナショナル・ハッピネス）を掲げて国づくりを進めている国。ブータン発のGNHとは一体何なのだろうか?

GNHを提唱したのは、現在の第5代国王ジグミ・ケサル・ナムギャル・ワンチュクの父である第4代国王ジグミ・シンゲ・ワンチュク。彼は、1972年に弱冠16歳で王位を継承、1979年に「GNPを盲信することなく、むしろ、GNHを大切にする国づくりをしていきたい」と宣言、以来、国民の生活への充足感を高める社会づくりを目指してきた。

GNHと「相互依存関係性」

GNHの考えの根本を形成するキーワード、それは「相互依存関係性」にある。「相互依存関係性」の意味を理解するには、仏教の「輪廻転生（りんねてんしょう）」の考え方と重ね合わせて理解すれば、わかりやすい。輪廻転生とは、人、動物、昆虫など、生きとし生けるものの間で生まれ変わりが連綿と続いていくとする考え方。この考え方に立てば、たとえば、目の前に現れた一匹の犬は、もしかすると、自分の祖父の生まれ変わりかもしれないと思い、その結果、その犬への慈しみを感じる。すべての生命を何らかの形で自らとつながるものと考え、その結果、他者を、動植物を、動植物の暮らす山、川、海、土、木を大切にする。

GNHとは、相手への思いやりの気持ち（利他）が中核にあるといってもよいだろう。自分ひとりの利益を優先するのではなく、つながりのある人、社会、自然環境との間の依存関係がもたらす利得は、何かを考え、それを大きくしていこうとする考え方がGNHの概念といえる。

GNHの4本柱

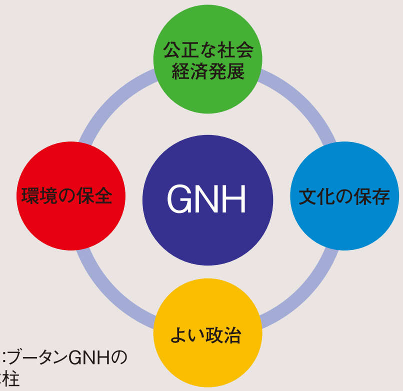


図1:ブータンGNHの4本柱

ブータン政府は、GNHは4つの柱で成り立っていると概念化した。

4本柱は、(1)公正な社会経済発展、(2)環境の保全、(3)文化の保存、(4)よい政治、を指す。GNH社会とは、経済発展は必要だが、国民の間に経済・社会格差をもたらすことのないようにする、生態系を守り大切にする、多民族社会の生活文化を大切にする、民主的に意

思決定に参加できる政治のしくみを基盤に据える、という考え方に立つものだ。（図1）

GNHと憲法

具体的にどのような政策を進めれば、GNH社会づくりへと向かうのか。ブータン政府は、それまでの君主制から2008年に選挙によって議会制民主主義を導入し、初めての憲法を制定・発布した。この憲法の第9条第2項の中に、「政府の役割は、国民がGNHを追求できるような社会の諸条件の整備に努めることにある」という形でGNHが明記されている。GNHというのは、個々のブータン人の幸福度を無理やり保障したり、幸福を定義づけたりするものではない。個々のブータン人がさまざまに思い描き充足する生活を実現できるよう、政府がブータンの社会環境整備に努めることを規定する。

憲法の中から、具体的に政府がなすべきことのいくつかを例示しておこう。所得格差や富の集中を最小限に努める、10学年までの無償教育を保障する、近代医療と伝統医療を用いて国民に無償で基礎的公衆衛生サービスを提供する、国民に働く権利や職業訓練の機会を与え労働条件の整備に努める、国土の最低60％以上を森林として保全する、地域生活の協働や拡大家族の保全に努める、などが挙げられる。これらから、GNH社会が目指すものの具体的イメージをつかむことができるだろう。

GNH指数

ブータン政府は、GNH社会の達成目標を具体化し、その進捗状況を確認するために、2008年に国立ブータン研究所がGNH指数を発表した。GNH指数とは、ブータン国民がどの程度まで生活への充足度を高めているかを測るための「ものさし」であり、GDPを代替する発展指標の1つといえる。2010年の改訂を経て、現在に至る。

GNH指数では、(1)暮らし向き、(2)体の健康、(3)心の健康、(4)教育、(5)生態系、(6)文化、(7)時間の使い方、(8)コミュニティの活力、(9)よい政治、の9つの生活領域ごとに、ブータン国民の中で、どれくらいの割合の人がどの程度までの充足水準に達しているのかを計測する。GNH指数によって、充足度の低い領域や人びとを見つけ出し、それらの領域や人びとに対して、優先的に改善策を講じていくというしくみを作っている。

日本にGNHは役立つのか?

「GNH」は、日本の地域社会づくりの参考になるのだろうか。現在、日本の多くの地域が直面している問題には、経済成長によって拡大した格差や社会的差別の解消、環境を破壊しない経済活動の推進、固有の地域文化の保全、そして、住民参加の意思決定が含まれ、これらは、奇しくもGNHの4本柱に他ならない。ただし、ブータンのGNH構想や指標を日本にそのまま適用することは正しい解決策にはならないだろう。日本の地域社会の諸条件に適合した「日本型GNH」（草郷2011）を作り上げ、その実践にあたっては、日本の中で

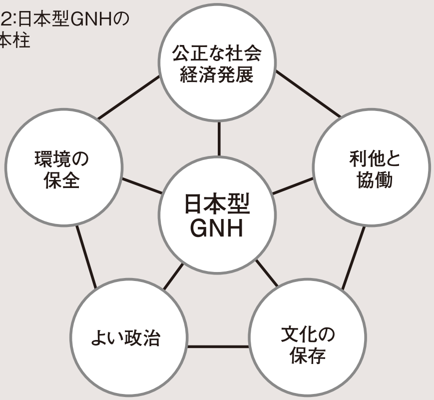


図2:日本型GNHの5本柱

参考になる実践を見つけ出していくことが重要なのである。

日本型GNHとは、ブータンGNHの4本柱に「利他と協働」を加えた5本柱（図2）から成り立つものだ。利他と協働とは、地域内の人間同士、あるいは、地域内と地域外の人と人のつながりの生成と活用を奨励する。暮らしの質を高め、住民の幸福感を上げるためには、5本柱によって、多種多様なつながりを生み出し、それらを活かすことで、お金だけでは得られない人と自然を大切にする豊かな地域社会～「つながり生成型共生社会」～を目指すことなのである。

つながり生成型共生社会を具体的にイメージするため、東京都荒川区のGAH（荒川総幸福）、熊本県水俣市の地域再生の取り組みを紹介しよう（枝廣・草郷・平山2011）。

●荒川区のGAH：『区政は区民の幸福のためにある』

東京都荒川区は、ブータンGNHに倣（なら）い、荒川区民総幸福度（GAH）を掲げ、自治体行政を進めている。荒川区のGAHの取り組みは、トップダウンではない。荒川区は、まず、区の将来を考える生活ビジョンづくりの市民委員会を結成。市民委員会が区長に出した答申をもとに、GAHを前面に打ち出し、環境、健康、教育、子育て、産業育成などに関する具体策を検討していった。区民が主体的に区のあり方について意見を出したことで、GAHの導入が決まり、不幸な区民を最小限にするための行政運営がなされているのである。現在、幸福度の低い人の生活状態の把握につとめ、優先的に支援すべき人を特定するしくみやGAH指標の開発が進行中である。（図3参照）

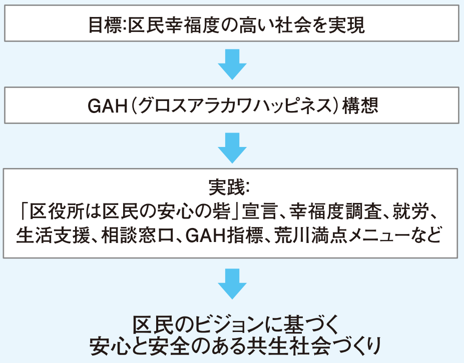


図3：荒川区GAH型共生社会づくりのステップ

●水俣市の環境モデル都市：『もやいなおしで社会のつながりを再生する』

地域につながりを再生させることは並大抵のことではできない。水俣病で甚大な環境破壊と地域社会の亀裂を経験した熊本県水俣市は、「もやいなおし」の理念と環境共生経済を目指す活動によって地域再生への努力を続け、2008年に政府から「環境モデル都市」に指定され、2010年にはNPOにより環境首都にも選ばれた。「もやいなおし」とは、水俣病患者、行政、市民の間に心と心の通じ合う関係性を構築し、各々の利害や立場を越えて、協働で町の発展に取り組んでいく方向性と姿勢を示したものだ。水俣が取り組んだことは、水俣社会のビジョンづくり、ビジョン実現のための水俣発のアイデア（行政参加、環境マイスター、ごみ削減協定、地元学（吉本2008））を展開したことにある。マイナスのイメージで、ミナマタという名前が世界に知られた。これからは、環境と人に優しい先進的な経済社会づくりに取り組む町として、プラスのイメージで世界中に知られるようになることを目指した取り組みが、着実にその成果をあげつつある。（図4参照）

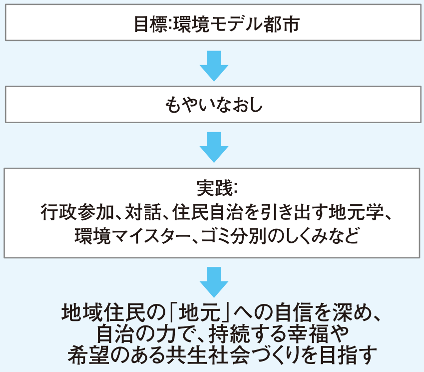


図4:水俣市の環境モデル都市への再生ステップ

ブータン生まれのGNHは、日本が経済成長から社会進歩を目指す過程での羅針盤になりうる。人々が地元の社会や自然環境のあり方にこだわり、創造や工夫を重ねていくことによって、一人ひとりが活き活きと生活を実感できる地域社会づくりへと邁進していきたいものである。

[参考文献]
・枝廣淳子・草郷孝好・平山修一（2011）「『GNH（国民総幸福）』―みんなでつくる幸せ社会へ―」海象社
・草郷孝好（2011）「日本型GNH」ニッポン前へ提言論文佳作　朝日新聞社
http://www.asahi.com/special/10005/TKY201109040194.html
（2013年7月20日アクセス）
・吉本哲郎（2008）「地元学をはじめよう」岩波ジュニア新書　岩波書店

善く生きる
草郷孝好

●くさごう たかよし＝1962年愛知県生まれ。東京大学経済学部卒。米国ウイスコンシン大学Ph.D（開発学）。世界銀行、国連開発計画（UNDP）、大阪大学准教授などを経て、2009年より現職。『GNH（国民総幸福）：みんなでつくる幸せ社会へ』（海象社、2011年＝共著）ほか論文多数。

ジャカランダの花が満開を迎えるプナカゾン（写真は、松田宗一、奥村彰二、ブータンミュージアム提供）

ブータン王国のGNHとレジリアンス

野坂 弦司
ブータンミュージアム
NPO法人幸福の国理事長

♪「しあわせ〜てなんだっけ♪」という歌があったような…。幸福度が高い国は、いわずとしれたブータン王国。日本では、福井県。共通するハッピネスを、福井県にあるブータンミュージアムの野坂氏に紹介してもらおう。

異次元の別世界

ブータン王国の玄関口はパロである。24時間眠らないタイのバンコック空港を早朝にとびたち、バングラデシュのダッカ空港経由で、ブータン王国へ入る。左手にヒマラヤのチョモラリを見ながら、山と山の間を縫うように、パロ空港へ向かう。スリル満点の飛行だ。

パロ空港は全くの異国である。頭がふらつき、気のせいか息苦しい。ここは標高2300m、空気が薄い。人々はみなゆっくりと歩いている。ブータンでは、時間もゆっくり流れているようだ。男も女も民族衣装を身にまとっている。男性の服はゴと呼び、チベット服とよく似ている。日本のドテラ・丹前そっくり。女性の服はキラと呼び、東南アジア風の一枚布である。建物の装飾も男女の服装も色彩がはっきりしている。それが異次元の世界へ来たような錯覚の原因であろうか。

首相官邸

官邸入口の門を車でくぐると、そこは広大な前庭である。人っ子一人いない。不思議な世界だ。犬が一匹いた。正面の石段の前に車をつけると2人の女性がどこからともなく現れた。案内されるままに入る。大きな木組みの玄関、分厚い巨木の床板、そして各部に施されたブータンの紋様、まるで龍宮城にでもいるような感じである。異質の空間、異次元の世界である。

国会議員の総選挙中で首相は空席、代理の最高裁長官と面談。お互いに3mほどの長さの白いショールを交換し、それを肩にかけてくれる。1人当たり年間所得が2千ドルに満たない貧しい国ではあるが、政府高官も列席の人々も堂々としていて好感をもてた。国王ご夫妻へ福井県知事の伝言と謹呈品として、越前織田焼の陶器と漆器の河和田塗の茶道具一式と岡倉天心著、千玄室訳の英文「茶の本」をお渡しした。

最高裁長官と面談する一行。長官の隣が野坂氏㊨白いショールが印象的

ブータン王国の生物多様性

　原生林に覆われた国土は、平野をほとんど持たない。ヒマラヤ山脈のすそにひろがる急峻な山国である。マナス野生動物保護区をはじめ9つの国立公園や保護区がある。国土の2割以上を占め、それぞれの森林地帯を結ぶ緑のコリドール（けものみち）があり、野生動物が自由に行き帰り出来る。森林を国の資源とみる考え方をとらず、将来にわたって保護し子孫に残す貴重な財産という考えをとっている。森林局長や担当大臣も勤めたリョンポーC・ドルジと面談したが、「開発のスピードが速すぎる。心配している。私達は1990年にパロ決議を採択し、仏教的な中道の精神を堅持しながら必要な開発を必要なスピードで行うこととした。現状は早すぎる」との意見であった。

　ブータンの森林面積は72.5%と世界トップクラスである。川やヒマラヤの森林限界をこえる高地、氷河湖などを除くと森林可能面積の90%以上が森林である。これは福井県ともよく似ている。森林局は森林を守るだけでなく、動植物相の保全の責任を持っており、国全体で自然環境保護に取り組んでいる。また地方自治にも注力し、各地方に森林管理官を置き、国の方針を徹底すると同時に、人々の参画を促している。

　ブータンは世界有数の生物多様性のホットスポットと位置づけられており、稀少動物、稀少植物などの宝庫である。ヒマラヤの高地の山野草にはほとんど全て何らかの薬効がある。低地の亜熱帯ジャングルは鳥、昆虫、バクテリア等が密生し未発見の薬品の宝庫である。難病に効果のある数多くの未知の特効薬が眠っていることであろう。

峠よりヒマラヤを望む

GNHの精神　リーダーの人格と資質

ブータン四代国王が国連で「ブータンはGNPを追求するのではなく、国民すべてが幸福になることを目標としたい」と発言。このGNHの精神が世界各国から徐々に注目を集めるようになってきた。最近では各国持ちまわりで「GNH会議」が開催されている。

昨年にはブータンが提唱し、毎年3月20日を「世界ハッピーデー」にすることを国連が決議した。ブータンのGNHとは、いたずらに経済最優先の開発を進めるのではなく、国民が等しく幸福な生活を送れるように国がリーダーとなって、あらゆる政策を進めようとするもので、四本の柱がある。一つ目は、自然環境の保全により、壊れやすいヒマラヤの自然との共生をはかる。二つ目は伝統文化の継承による民族の自守自立をはかる。三つ目は過度な経済発展による生活破壊を防ぎ、持続的・公正な社会経済の発展を進めていく。四つ目は良い統治といわれるリーダーの無私の思想、公平な政策の実行である。歴代の国王の功績がよい例となって残っている。これらがこれからのリーダーたちに求められる大切な規範になると思われる。

私はこのGNHをより普遍化させて、広く世界に広めていくことを願っている。幸福の追求を通して世界平和を実現するのである。ブータンは小国である。だからこそ国連という舞台を重視し、そこでの発言に大きな意義を見出している。そして世界各地で開催されている「GNH研究会」はブータン研究所のカルマウラやブータン首相が重要な役割を果たしている。軍事力や経済力でなく、幸福力で世界をリードしていく

時代の到来を願って、その先頭を走るのがブータンであり、日本でありたい。

福井県と知事ネットワークで「希望」を研究

福井県の西川一誠知事がリーダーとなり、地方自治体において、県民に将来の希望を持ってもらう研究を始めた。これは5年前に釜石市と東京大学の玄田有史教授の研究室と福井県が始めたものだ。希望のための項目を指数化してローカル・ホープ・インディックス（ＬＨＩ）と名付けた。福井県ではブータン王国のＧＮＨ研究とＬＨＩとの比較を通して、地方自治の目指すべき方向を真摯に探っていこうとの趣旨で覚書をとりかわした。私達のブータンミュージアムも微力ながらこれに賛同し、日本ブータン幸福学会を立ち上げて、この研究を更に進めていく。

福井県との相似性

アジアモンスーン地帯の東の端に位置している福井県は、照葉樹林帯の東限といわれる日本の本州の中央にある。照葉樹林文化の伝統を保持し、自然との共生を続けてきた。「里山」といわれる居住地の裏山に依存した生活をしている。

ブータン王国はアジアモンスーン地帯の西の端に位置し、照葉樹林がはじまっている。そしてコメ、ムギ、ソバ、ヒエ等の穀物を主食とし、農耕民族である。住居は木造建築が主で火災に弱い特徴がある。各部位に彩色されたブータンの建築は美しいが福井の民家も白壁と木組がよくバランスして美しい。両国とも独特の景観を生み出している。家は大きく多人数の家族が住んでいる。

伝統工芸が盛んなこともよく似ており、福井県も和紙、陶器、漆器、打刃物、織物、木工芸などが盛んで、長い伝統を持っている。ブータンは非インド、非中国と、隣国の文化の影響から孤高を守り、照葉樹林文化を伝えてきた。地理的には、天然の要塞の如く、周囲は高い山々で囲まれ独自の生物多様性や自然環境を守り続けてきた。この点でも福井県とブータン王国の相似性を見ることが出来る。ブータンが仏教を国教としているのに対して、福井県は日本でも有数の信仰心を持つ県であり、神社仏閣の合計では日本一の数を誇っている。仏教は永平寺大本山の曹洞禅宗と四つの本山を県内に持つ浄土真宗のメッカである。

また福井県は日本一の繊維王国である、かつては福井人絹取引所という商品取引所を県内に有し、その周辺では大手・中小の繊維商社が集まっていた。現在では衣類用の繊維産業だけでなく自動車用カーシートや土木用繊維も盛んである。染色、サイジング、織布、裁断、製形など幅広い関連業界を有している。

ブータンは手織りが一般的である一方、福井県では手織りは伝統工芸で芸術作品として制作している。福井県では一般のものはすべて自動織機によって製作されており、ほとんど無人で24時間操業で製造されており同じ繊維産業といっても大きな差がある。

福井県の農業はコシヒカリなどの米作中心で、ソバ、大麦など穀類の生産の

棚田

マニ車を回す修行僧

女性の正装

ウエイトが高い。果物、野菜などの生産は周辺に大都市がないこともあり、地産地消の傾向が強い。その点も市場機能未成熟のブータンと似ている。県民は新鮮な食品を満喫している。

　福井県の産業の中で、電力がダントツの一位である。インドへ電力を売っているブータンも電力が最大の産業である。また福井県には敦賀セメントがあり、ブータンも同様にセメントの生産が行われている。

照葉樹林文化

　ヒマラヤ山脈にさえぎられた風は、上昇気流となり、アジアモンスーン地帯の始まりとなる。そこから偏西風に乗り、南アジアから台湾、沖縄、九州、本土と移動してくる。ヒマラヤから日本までの雨を降らせる雲の流れが、豊かな水の供給源となる。これがアジアモンスーン地帯で、この一帯に照葉樹林が形成され、独自の文化が発達した。

　これを照葉樹林文化と命名したのは「秘境ブータン」の著書中尾佐助である。ブータン農業の父といわれる西岡京治の恩師である。私たち日本人が「ああ懐かしい」と感じるブータンの第一印象、そしてブータン好きになる原因がこの照葉樹林文化を共有していることにある。

　ブータンの歴史は隣接する超大国インドや中国（チベット）の影響を受け続けてきたが、照葉樹林文化という独自のアイデンティティを失うことなく今日に伝えている。それは天険な地勢と自然条件に守られていることによる。

　シャイな性格を持つブータン人と日本人との共通点を探すと驚くほど多い。信心深いこと。森林緑化率が世界トップレベル。衣服のゴ・キラと着物文化。コメなどの穀物中心の食文化。木造（土と木）の建造物。染色織物などの伝統工芸等々いくらでもある。

　一番大切なところは、自然との共生感である。自然を征服しようと考えるのではなく、しなやかに粘り強く自然と仲良く暮らすことを目指してきたのである。それこそが、これからの私達人類が生き残るための大切な条件である。

牛で耕作

モンガル市場、秤の子ども

世代をつなぐ大家族

北陸地方の民家は大きい。積雪地帯なので、冬期間の作業を家の中で行う必要があるからだ。また家族の人数が多い。３世代、４世代が同じ家に住んでいる。これは祖父母が孫を育てる環境が出来上がっていることを意味する。祖父母が孫を教え、また孫は数十年後自分の孫を教える。

大げさに言うと１００年の経験や知恵が子孫に伝わっていく。そして大家族の中で、揉まれた経験が精神を強くしていく。人間関係も家族から学んでいく。「兄弟は他人のはじまり」ということも大家族の中でこそ正しく学べる。

「オールフォワン、ワンフォオール」の考え方もひとりでに大家族の中で身についてくる。大家族は幸福の原点である。ブータンも日本もかつてはみんなが大家族であった。そして支えあってきた。

地方では日本も過疎になりつつある。都会に出た若者達は一人住まいが多い。個室に一人で住むと孤独になる。みんなで助け合って生きることが出来なくなる。幸福であるはずの毎日なのに、幸福を実感できなくなっていく。そこから種々の悩みや問題が出てくる。幸福の秘訣は〝大家族〟にあることを知らねばならない。

ブータンのレジリアンスに学ぶ

ブータンの人々の明るさはどこから来るのか。みんなが幸福だと自信を持って言えるのはどうしてなのか。その原因を探すために、何度かブータンを訪れたり、ブータン通の人々に尋ねたり、ブータンに関する書籍を調べてみた。

結論の第一が「輪廻転生の思想」である。この世に生を受けたすべてのものは、人間も含めて必ず死を迎える。そして善行をした人は、生れ変ってよい所へ再生する。善行をせず、誰にも気づかれないからと、悪事に手を染める人はいない。仏教が日常生活のなかに生きているのである。殺生を極度に嫌う。だから凶悪犯罪がない。

第二が「自然との共生の思想」である。

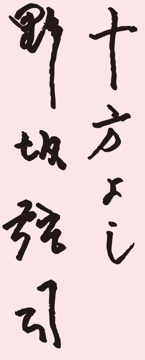
永年にわたって人々は天然の要塞ともいうべきヒマラヤ連峰や人跡未踏の亜熱帯ジャングルに守られた国土に生きてきた。自然に包まれて、自然と共に生きる知恵を先祖から受け継いできた。母なる自然への愛情と畏怖が共生の姿勢には強く感じられる。

第三が「絆」である。家族との絆、友人との絆、地域との絆が強い。いついかなる時でも、この絆によって守られているという安心感が人々を不安にしない。不幸にしない。この心の安定をもたらすものが強い連帯感である。

第四は独自の伝統文化を重んじることによる「自尊心」である。ブータン国民としての誇りといえよう。隣国のチベット（中国）の持つ独自の強烈な伝統文化、同じく隣国インドの独特の伝統文化に影響は受けながらも、深い所ではまったく違った照葉樹林文化を維持発展させてきた。そのプライドは強い。

第五は国王をはじめ国の指導者、国を動かしてきた人々の「無私の心」、国民の幸福を第一に考えるリーダーたちの高邁な理想を追求する姿勢は、ひろく国民から信頼されている。自分のことを考えず、まず他人の事を考える利他の心をリーダーたちはみな持っている。それが国民にまで深く浸透している。私は神秘の国、幸福の国、世界の桃源郷といわれるブータン王国からもっともっと多くのことを学びたい。

パロの国立博物館の前庭よりパロ谷を望む



●のざか げんじ＝滋賀県長浜市出身76才。1959年三谷商事入社。ミシガン大学短期留学、トヨタビスタ福井出向代表取締役、三谷商事取締役、常務、専務を経て、1994年に三谷設備代表取締役就任、2年後退社。1996年日本システムバンク株式会社を設立し代表取締役、2007年同社会長現任。2012年ブータンミュージアムNPO法人幸福の国理事長現任。社団法人福井経済クラブ理事長現任。

寄稿④
「しなやかでいこう！」

「和(あ)える」を会社にした女(ひと)

矢島 里佳
株式会社和える　代表取締役

インタビュー**北村和郎**
ダイヤモンド経営者倶楽部　メディアインキュベイト事業部長
（http://www.dfc.ne.jp/）
d-imo　NEO FRONTIERSより
（http://dimo.jp/neo-frontiers）

監修／**内藤 正明**

しなやかな女性起業家はいないかな? と試案していたら、内藤正明先生から一報が入った。「ぴったりですよ」。その人が矢島里佳さん。会社名は和える、あえると読む。伝統工芸と子ども目線の使い勝手と高いデザイン性に着目した。紹介は彼女の古くからの友人である、北村氏に担当いただいた。若い感性を全開にした和えるワールドにようこそ。

■はじまりは茶華道部から

矢島里佳は中学生（2003年）の頃、茶華道部に入部した。そのとき、日本の伝統文化や産業に興味を持った。高校3年生（2006年）の時に、テレビ東京の「TVチャンピオン2・なでしこ礼儀作法王選手権」にて優勝。日本の伝統に興味を持っているということに気づき、対外的にも明確なキャラクターイメージをつくりだした。

19歳（2007年）の頃から、日本の伝統文化を次世代に繋げる取り組みをしたいと考えるようになった。JTBの会報誌で全国の若手伝統作家を紹介する連載に携わり、「乳幼児や子ども向けの伝統産品」という新たなジャンルに出会う。この事業モデルが「学生起業家選手権」（東京都主催）で優勝したことを皮切りに、さまざまな起業家コンテストで入賞を果たす。

24歳（2012年）には、「21世紀の子どもたちに、日本の伝統をつなげたい」をコンセプトに、自社ブランド〝0から6歳の伝統ブランドaeru〟を立ち上げ、日本全国の職人と共にオリジナル商品開発を手掛けた。伝統技術や商品をマーケットと繋いだり、新たな可能性提案を手がける「和のコンシェルジュ」を事業の中核としている。

愛媛の和紙の職人さんと

aeru初のオリジナル商品「徳島県から本藍染の出産祝いセット」は、「キッズデザイン賞」を受賞し、注目を集める。その後、3つの産地の競作による「こぼしにくい器」、「和紙のボール」など、独自のコンセプトとデザイン性を追求した新商品を次々に提案。伊勢丹など有名百貨店などのコラボ商品販売やイベントの出店も多数実施した。

さらにこの事業が、日本独自の産業である〝伝統産業の活性化〟、〝伝統産業の後継者育成〟、〝子どもたちへの自国の伝統教育・感性教育〟、〝日本文化の海外発信〟、〝地方の雇用創出〟、〝地域の活性〟など、現代の日本が必要とするさまざまな社会価値を含有した取り組みとして注目される。メディアへの登場やゲスト出演、地方自治体と連携など行政からの依頼案件も多い。

その後「これから一生かけて何を発信していこう?」と考える中で、中学高校時代に所属していた茶華道部での原体験から、伝統産業の分野に注目した。すでに「伝統産業の衰退」が言われて久しい状況で、「日本独自の技術である伝統産業が、なぜ衰退しているのか?」を模索し、連載を始めたことが、ビジネス展開へのヒントになった。

一方でビジネスの学問的なアプローチ

をさらに深めるためと、経営者の学びのために、慶應義塾大学の修士課程へ進学を決めた。

商品第一弾は「徳島県から本藍染の出産祝いセット」

「本藍染の出産祝いセット」は、「日本に生まれて来てくれてありがとう」をキャッチフレーズに、赤ちゃんの誕生を社会全体で祝い、共に育てていこうという想いから生まれた。特注製作した桐箱にオーガニックコットン生地の産着など3点をセットした商品が、和える（aeruブランド）の第一号商品となった。

徳島の矢野氏と出会ったときから、ひそかに構想として温めていた。氏は江戸時代から続く伝統的な〝天然灰汁発酵建て〟を使ったこだわりの本藍染を手掛ける。藍染めの特徴である、抗菌作用、紫外線遮蔽、防虫、防臭、保温、保湿の効用と、本物の持つ色の美しさや質感がブランドコンセプトに合致した。「0から6歳の伝統ブランド」コンセプトを最も分かりやすく伝えられる商品として位置づけられ、開発には心血を注いだ。その甲斐あって販売前から予約注文も入り、販売直後から好調な滑り出しだ。

デザイン性の高さ、新たなライフスタイルを提唱

「和える」の製品は、伝統の技法を大事にしながらも、現代の人たちのライフスタイルにマッチした、機能性と質感高いものづくりを志向しているが、とくに力を入れているのはデザインにある。

著名デザイナー太刀川英輔氏の存在が大事な役割を果たす。和えるの目指すものに共感した、彼の独特の感性やデザイン力と、矢島氏の着眼力・発想力が融合し、同社独特の商品群を形成していった。現在の主力商品の一つである「こぼしにくい器」などは、まさにそのコラボレーションが体現された製品といえよう。

また「徳島県から本藍染の出産祝いセット」は、2012年「第6回キッズデザイン賞」を受賞するとともに、同年香港で開催された「Design for Asia Award 2012」でSilver Awardを受賞するなど、そのデザイン力は国内外で評価された。

和えるならでは「共鳴性」高いビジネスモデル

株式会社「和える」の個性は「成長・拡大することをみんなが応援したくなる会社」だ。日本の将来のため、子どもたちのため、そして何よりも「日本らしさ」の継承のため、同社の取組みに対する共感の裾野は広い。矢島氏の周りにはその活動を後押ししようとするネットワークが構築されている。そして現在、全国の若手伝統作家と150名以上の繋がりが生まれた。同社の理念や感性に共鳴し、親しみやすい人柄に魅かれて繋がりを深めてきた。また各種のメディアへの登場頻度が高いのも強み。メディアに出演したり講演をするたびに、ファン層が広がり購買に結び付く。今までにない「共鳴型ビジネス」を実現しつつある。

職人が一つひとつ手で染め上げたホンモノの本藍染

aeruブランドの主な商品

●本藍染めの出産祝いセット・タオル（徳島県）
●こぼしにくい器
山中漆器（石川県）、砥部焼（愛媛県）、大谷焼（徳島県）
●湧き水で漉いた和紙のボール（愛媛県）
●桜の木のはさみ（宮崎県）
※全国の伝統産業関係者から多くの依頼があり、さまざまなコラボレーションのカタチを模索。

抗菌作用を持つ本藍染で赤ちゃんの肌を包む「徳島県から本藍染の出産祝いセット」

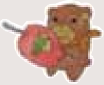
日本の伝統の素材と技術で一つひとつ想いをこめて手作りした「こぼしにくい器」

毎日使う器だからこそ温もりあふれる日本のホンモノを使ってほしい

内側に「返し」を付けることで、
食べ物がスプーンにのりやすく、
すくいやすい

宮崎木工の職人さんの高い技術で実現した「桜の木のはさみ」紙しか切れないので、初めて手にするはさみに最適

愛媛県の和紙漉き職人さんが一個ずつ丁寧に漉いて作った「湧き水で漉いた和紙のボール」



■「和える」に込められた意味

日本の伝統と今を生きる私たちの新しい感性を「和える」という意味に込めた。「混ぜる」のではなくあくまで「和える」。それぞれのもとの姿、本質を大事に残したまま融合させるという発想の日本ならではの言葉で、「和」という文字が入っていることからも、和文化に関わるビジネスを手掛ける企業イメージが伝わる。

　ロゴにもこだわる。今までの日本の伝統をあらわす赤い日の丸、そして日本の伝統の新しい可能性に挑戦するように、少し飛び出ている七宝柄の円で構成されている。このロゴの最大の特徴は、二つの円がどのようにずれてもいいということ。七宝柄の円が、日の丸から右上にも左下にも飛び出すさまが「思いもよらない動きをする子どもたち」をイメージする。

■メッセージ

●私は、日常の中にもっと「手仕事」を感じられる場所を作りたい。和えるのホンモノの定義は、〝本〟当に子どもたちに贈りたい日本の〝物〟＝ホンモノを追求することです。無機質なもので子どもたちの周りを固めてしまうような社会にはしたくない。子どもの頃に感じた印象的な色、質感、手触りなどは、その後の感性に大きな影響をもたらします。「割れることを知る」からこそ、物のありがたみや価値が分かります。小さい子どもが必ずしも大人が想像するような可愛らしい物だけを必要としてはいません。子どもたちの感性豊かな未来のために少し見直したり理解を深めてほしい部分がたくさんあります。ものづくりから始まった和えるですが、これからは「職人さんに逢える和えるツアー」などを実施したいです。実際に和えるの商品を作っている職人に会い、ものづくりを経験することで、ものづくりの魅力や難しさ、人がモノをつくる根源的なことを親子で体感出来る

環境づくりも行っていきたいです。

●全国には意欲的で魅力のある若手の伝統産業に携わる職人がたくさんいます。一方では巨大マーケットや企業では、その感性や職人の考えや技術を受け入れ活かすことが難しいのが現状です。その中で双方の気持ちを理解できるのは「和える」です。私が翻訳者となり、さらにマーケット提案まで行うことで、双方に実りある関係構築ができるようになりたいです。

●株式会社「和える」と自社商品の数々は私の子どものような存在です。親御さんがお子さんの未来のため深い愛情を注いでいかれるように、私も同じ想いで「和える君」に愛情を注いで一生懸命に育てました。最初は一人で育てていた和える君も、2歳と少し経った今ではいろんな人が一緒に育ててくださるようになってきました。

子育ては社会全体で育てることが本来の姿だと信じています。これからも和える君をみなさんと一緒に育てて行きたいと願っています。

職人さんとそのご家族と、和えるのメンバーで

和える 矢島里佳

●やじま りか＝1988年、東京都生まれ。中高時代に日本文化に興味を抱き、大学時代には雑誌の連載で20～40代の若手の職人を取材。誇りをもって働く姿と先人の知恵が凝縮された技術に感動し、2011年3月、慶應義塾大学卒業と同時に「次世代の子どもたちに日本の伝統をつなぐ」株式会社和えるを起業。

〈著書〉「その常識もしかして非常識?! 自分を魅せる本当のマナー」高陵社書店、2011/4/28
「AO（FIT）入試で慶応大学法学部に合格する!!」エール出版社、2008/6/18
「やばい!戦略的AO入試マニュアル」ゴマブックス、2008/3/21

●和えるホームページ
http://a-eru.co.jp/
●和える公式Facebookページ
http://www.facebook.com/aeru.jp
●和える公式twitter
https://twitter.com/aeru_

⑤ M・O・H レポート〈しなやかでいこう!〉

手作りミニ太陽光発電ワークショップ&これからの新しい暮らしを考える集い参加しました!

プログラム

◆第一部／

「新しい暮らしとエネルギーを考える」(10:00～11:00)

講師：内藤正明氏（京都大学名誉教授・KIESS 代表理事・SCS 名誉館長）

藤野電力(市民によるエネルギー自給の取り組みとして、メディア等多数出演)

◆第二部／

「手づくりワークショップby藤野電力」(11:00～16:00)

ミニ太陽光発電システムは、太陽の光から電気を「つくり」「貯めて」「使う」小さな太陽光発電システムです。電力会社に頼ることなく、自分で電気が作り出せるこのシステムは、いくつかの機器を配線でつなげば、できあがり。工具の使い方や各機器への接続方法などを学びながら、約2～3時間程度の作業で簡単に接続できます。

◆日　程／2013年6月3日

◆参加者／組み立て参加者10名、見学参加者20名

◆会　場／鈴鹿カルチャーステーション(三重県鈴鹿市)

◆主　催／NPO法人鈴鹿循環共生パーティー(SJP)

◆共　催／鈴鹿カルチャーステーション(SCS)

NPO法人循環共生社会システム研究所(KIESS)

ワークショップのスタートです!

内藤先生の話を熱心に訊く参加者

これからの新しい暮らしを考える集い

弊誌37号で紹介した『鈴鹿カルチャーステーション（SCS）』で、暮らしのエネルギーを考える会が開催されました。平日にも関わらず、地元・三重や滋賀、京都、神戸、埼玉から約30名の参加者が集まりました。

まずは弊誌でもお馴染み、SCSの名誉館長でもある内藤正明先生の講演からスタート。「市民による市民のための幸せ社会づくり」と題し、自然共生社会を目指して私たちにできることを一緒に考えました。経済至上主義社会に隠れ、地球温暖化問題は着実に人間への脅威を見せています。これからの新しい暮らしは、市民一人ひとりが強い想いを持って自分たちの暮らしを考えなければなりません。企業や政治に翻弄されず、社会づくりを「市民の手に取り戻そう」と話されました。

続いては、メディアから引っ張りだこの、藤野電力・小田嶋さんのお話。藤野電力では、住民が自ら参加出来る自立分散型の自然エネルギーづくりに取り組むため、全国の地域で太陽光パネルのワークショップ活動をされています。今回で94回目です。

内藤先生の話に何か熱いものがこみ上げた様子の小田嶋さん。3・11を受け、財産をなくし情報から切り離され、不安な夜の闇にいても、太陽光パネルが1枚あれば、その灯りで人は安心できると語ってくださいました。

太陽光パネルを作ろう！

いよいよワークショップへ。パネルの大きさは645×540×35㎜と小ぶりながらも、一日の発電量は液晶テレビ40Wで約5時間、蛍光灯20Wで約10時間使用可能です。

見学者も一緒になって8枚のパネルを組み立てました。過充電を防止するチャージコントローラーとバッテリー、直流の電気を交流の電気に変換するインバーターなどの配線を接続していきます。導線を切らないようにケーブルのゴム被膜を取る作業や、工具を使っ

❶ ライトが点くか確認中　❷小田嶋さんがサポートしてくれました　❸ 太陽光発電に期待が膨らみます　❹ 完成しました!
❺ 外側のゴム被膜を取るのが難しい!

て端子を固定する力作業に苦戦する人もいましたが、藤野電力の方が作業を代わりに行うことはありません。自分の頭で考え、壁を乗り越えて欲しいというメッセージのようでした。初めて知り合った人同士が協力し合って作る光景はなんだか温かく感じられました。

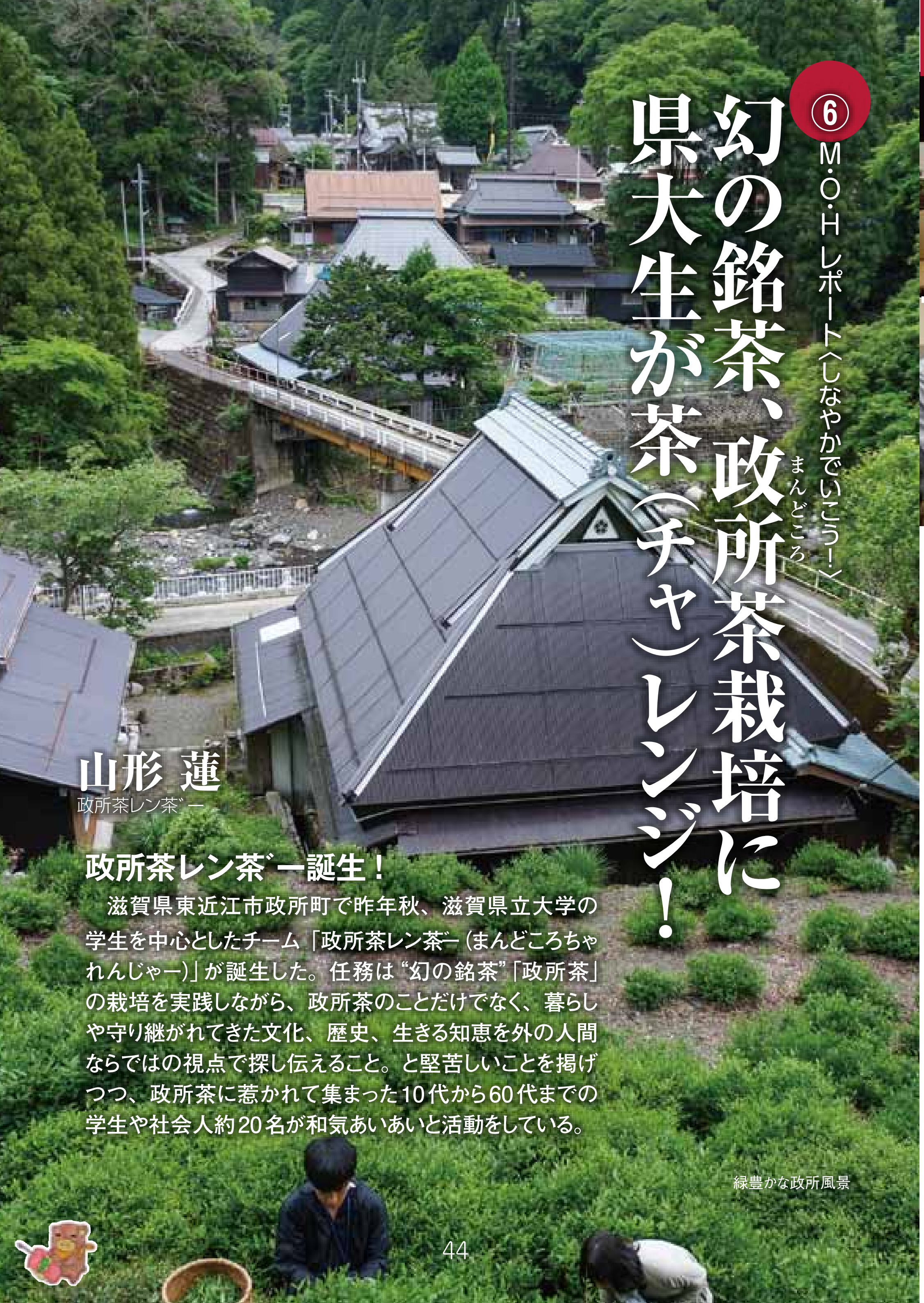
できあがり!

配線が完了すると室内照明で扇風機や携帯電話の充電を実践し、「ちゃんと動いてる～!」とあちこちで歓声が。

参加者からは、「大人の自由研究みたいで楽しかった」、「自分の手で実際に作ることでパネルの仕組みが理解できた。電気屋さんに行く楽しみが増えた」、「パネルを窓辺に置いて、照明や携帯電話の充電に使いたい」などの感想が聞かれました。

電気の消費量を少なくしつつも、電気の便利さを否定したり我慢したりするのではなく、自然の力を借りて自然と共生する生活への移行は可能かもしれません。充実したイベントとなりました。

完成した太陽光パネルを持って、太陽の下でパチリ



⑥ M・O・H レポート〈しなやかでいこう！〉

幻の銘茶、政所（まんどころ）茶栽培に県大生が茶（チャ）レンジ！

山形 蓮
政所茶レン茶゛ー

政所茶レン茶゛ー誕生！

滋賀県東近江市政所町で昨年秋、滋賀県立大学の学生を中心としたチーム「政所茶レン茶ー（まんどころちゃれんじゃー）」が誕生した。任務は“幻の銘茶”「政所茶」の栽培を実践しながら、政所茶のことだけでなく、暮らしや守り継がれてきた文化、歴史、生きる知恵を外の人間ならではの視点で探し伝えること。と堅苦しいことを掲げつつ、政所茶に惹かれて集まった10代から60代までの学生や社会人約20名が和気あいあいと活動をしている。

緑豊かな政所風景

地元茶農家・白木氏の茶畑にて（白木氏は右から4人目）

宇治は茶どころ 茶は政所

近江茶の産地といえば土山や信楽の朝宮がよく知られているが、政所も〝宇治は茶どころ、茶は政所〟と茶摘み唄に歌われ全国に名を馳せた銘茶の産地である。

その政所があるのは永源寺ダムのさらに上流、三重県との県境に位置し、木地師（きじし）発祥の地として知られる東近江市奥永源寺地域だ。政所の八幡神社には木地師出身の面工によって作られたと思われる室町から江戸にかけての能面が保存されている。地形は鈴鹿の山脈に囲まれ面積の9割以上が山林。平地は少なく、愛知川の源流が作り出す谷筋に沿って80世帯ほどの集落が続いている。

集落を歩けば、茅葺き屋根の民家や蛇口から絶え間なく流れ出る山水、そして家々の間を縫って山裾まで広がる茶畑が織りなす美しい風景に出会うことができる。

ここに茶栽培が伝わったのは室町時代。地質や昼夜の寒暖差、そして川から立ち上る朝霧など政所の風土すべてが茶栽培にとって好条件だった。風土が生み出す香り高く深みのある茶の味わいは永源寺の学僧を通じて京の都で高い評価を受けた。そのため「幕末から明治にかけては茶摘みの時期に１０００人もの人が鈴鹿の山を越えて手伝いに来た」と言われるほど盛んに茶葉生産が行われていた。

しかし茶栽培だけでは暮らしが成り立たないこともあり、時代の流れとともに働き盛りの世代は集落を離れていった。茶畑は急斜面にあり機械が入らない。重労働の作業が続き、高齢者だけで管理することは難しい。世間のお茶離れも加わって、次第に茶畑の面積は減少し生産量も落ちた。今や〝幻の銘茶〟と言われるほど希少価値の高いお茶となってしまったのだ。

❶❷政所の人に活動を知ってもらおうと、活動記録を「茶レン茶゛ーナル」にまとめ全戸に配り歩く ❸ 昨年12月から毎月発行している「茶レン茶゛ーナル」 ❹「茶レン茶゛ーの茶」80グラム1200円、50グラム800円で販売中

無農薬・手摘み 昔ながらの茶づくり実践

この政所に昨年秋から毎月通い、550㎡ほどの茶畑を借りて賑やかに活動しているのが政所茶レン茶゛ーである。茶畑の持ち主である地元茶農家・白木駒治さんの指導のもと農業初心者のメンバーたちが、化学肥料や農薬を一切使わず茶葉を栽培している。それ以外にも、地元の人たちへの聞き取りや、昔懐かしいお菓子作りを教わる他、政所の人たちに活動について知ってもらおうと報告会を開催したり、月に一度「茶レン茶゛ーナル」情報紙を発行している。

活動のきっかけは、大学の「地域再生システム（特）論」という地域活性化をテーマにしたフィールドワーク型の授業だった。地域の中を実際に歩き、地域が抱える課題を探り、解決策を提案することが授業の目的である。昨年9月の授業では学部生や院生、教員やサポートの社会人ら10名ほどが自治会長や茶農家の人の案内で政所を歩いた。メンバーは風景や政所の人たちの暮らしぶり、政所茶の今まで味わったことのない美味しさに魅了された。手つかずになっている茶畑で自分たちもお茶づくりをしながら政所と関わり続けたいと提案を決意。政所の人たちは「やってみるからには茶摘みだけでなく1年を通して世話すること、1年限りではなく長期的に続けること」を願い迎え入れてくれた。そして秋の草取りから始めた茶畑で今年6月、初めての茶摘みをした。昔ながらの手摘みで摘んだ茶葉は、政所茶のPR用にと「茶レン茶゛ーの茶」という商品名で現在自主販売中だ。

政所茶を守り継ぐ想いに触れて

活動を初めてまもなく1年。作業を

❶ 丁寧に手摘みしていきます ❷みずみずしい新芽 ❸ 茶摘みを終えて「お疲れ様でした!」

通して学んだことは茶栽培の手順だけでなく、茶樹を無農薬・有機肥料で栽培することの難しさや斜面での作業の厳しさ、そして茶葉が芽吹く喜びやそれを摘む清々しさだった。そしてそれは、自分たちが一目惚れしたこの茶畑のある風景を守る、政所の人たちの想いに触れることでもあった。

実は政所の茶樹はヤマチャという希少な在来種である。現在日本の栽培茶樹の約9割が栽培用品種のヤブキタになる中、政所では昔から変わらぬ茶樹と製法で茶を作り続けてきたのだ。

茶畑を絶やすことなく守り続けることがどれほど難しいかを肌で感じる今、自分たちは政所茶の存在とともに、政所茶を守り続けてきた政所の人たちの生き方や想いを伝えていかなければと思う。

茶縁 山形蓮

●やまがた れん＝1986年生まれ。大津市（旧滋賀郡志賀町）育ち。滋賀県立大学人間文化学部在学中からお年寄りへの聞き取り活動に夢中になり、県内外の農山村を巡る。東日本大震災後は宮城県の漁村に入り聞き取りを行う他、女性の仕事づくりとして復興支援商品「ほたてあかり」の企画運営に携わる。現在は彦根市内で働きながら、政所茶レン茶ーのメンバーとして活動中。

●政所茶レン茶ーについてのお問い合せは mandocoro.challenger@gmail.com へお願いします。「政所茶レン茶ーの茶」購入ご希望の方もこちらで受け付けています。フェイスブックページ「政所茶レン茶ー」でも活動の様子を随時公開中ですのでぜひご覧下さい。

ゆらゆらと手漕ぎ舟から家棟川を知る

野洲ウォーク（Vol.21）

野洲で手漕ぎ船に乗って、伝統食の漁師料理を味わい、びわ湖の水と地域の自然環境保全の大切さについて考える

◆日　時 / 2013 年 6 月 23 日（日）
◆場　所 / 野洲びわ湖畔、家棟川、あやめ荘、菖蒲自治会館
◆ プログラム

10:00　JR 野洲駅北口 集合
・ビワコマイアミランド・あやめ港・あやめ浜の散策
11:10　家棟川エコ遊覧船 乗船
・手漕ぎ船上から家棟川流域および近江富士、比良山の眺望
12:15　昼食（あやめ荘）
・びわ湖の伝統料理「漁師料理」を味わう
13:15　講演と意見交換会（菖蒲自治会館）
・野洲市環境基本計画の取組みについて
講師：福山 雅治 さん（野洲市環境経済部環境課 課長補佐）
・びわ湖と共に 50 年
講師：松沢 松治 さん（びわこの水と地域の環境を守る会 代表）
16:00　グループ討議と発表
17:00　菖蒲自治会館にて解散

◆参　加 / 23 人
◆主　催 / NPO 法人コミュニティ・アーキテクトネット ワーク（環人ネット）
◆レポート / 樋上 真吾、中塚 清、政本 幸三（文責）

三上山からびわ湖に至る豊かな〝水と緑〟に囲まれ、多様な自然環境を有する野洲市は、里山から湖まで一連の自然環境保全に市民が活発に取組んでおり、県内外から注目されている。

今回の野洲ウォークでは、野洲のびわ湖畔あやめ浜を訪れ、エコ遊覧船に乗船。びわ湖の伝統食「漁師料理」を味わった。びわ湖の水と地域の自然環境保全の大切さについて、地域の人たちと意見交換するミニフォーラムも開催した。

◆野洲ってどんなまち?

今回の研修場所として選んだ「野洲」というまちの地域特性について、最初に触れておきたい。

野洲の土地は、もともとは野洲川、日野川の沖積作用によってつくられた三角州と扇状地から成り立っている。古くから「近江米」の産地として、稲作を中心とする農耕社会の発展があったことは多くの銅鐸出土や古墳、神社仏閣、史実・伝承の存在が物語っている。

滋賀県の湖南地域に位置する野洲市は、平成16（2004）年に山側の野洲町とびわ湖側の中主町とが合併して誕生した新しいまちである。野洲市の大きな強みは、多様な自然環境を有している点にある。美しい三上山（通称「近江富士」）からびわ湖に至る豊かな〝水と緑〟に囲まれた素晴らしい自然環境を有し、温暖な気候と交通の利便性にも恵まれた、住みやすい、住んでみたいまちである。もう一つの強みとして、「人権と環境」を基本にまちづくりが進められている点が挙げられる。人と人、人と自然とのつながりを大切に、活発な市民活動が行われている。

このような特色、強みを有するまちではあるが、外部からは野洲の良さが見えにくく田舎まちであると評価されている。その主な理由として、①まちの魅力づくりに地域資源が十分

のどかな風景だが、ゴミの漂着、外来生物の繁殖など問題を抱える

に活かされていない、②活発な市民活動がまちのにぎわいに活かせていない、③まちの魅力をアピールする情報発信力や来訪者に対するおもてなし体制が弱いという点が挙げられる。野洲市が目指している「賑わいと活力あるまちづくり」を進めるためには、野洲の強みである多様な自然環境（里山、川、田園、湖）を活かしたグリーンツーリズムの推進や農産物、湖魚などの地域資源を活かした伝統食の普及への取組みが強く求められる。

◆湖畔の散策～家棟川手漕ぎ遊覧船～美味しい漁師料理

午前の最初の研修先は、リゾート地であるビワコマイアミランドと、さびれたあやめ港、あやめ浜という対照地区である。地元の漁師である松沢松治さんより50年という短い期間で白砂青松の地であったびわ湖の原風景が今の姿に変貌した経緯を聴いた。地域開発と自然環境の維持・保全を両立させることの難しさを改めて認識させられた。

次に、野洲の自然環境を判断するリトマス試験紙的な役割を果たしている家棟川を訪れ、手漕ぎ遊覧船（NPO法人家棟川流域観光船）に乗船した。船頭さんから家棟川流域の景観の変化や懐かしい昔話を聞いた。

なかでも戦時中菖蒲にオランダ兵の捕虜収容所があった頃、厳しい食糧事情の中で、当時の近隣の農家の方々が収容所内に農作物を投げ入れ捕虜が餓死しないように気遣った話は印象的だった。食糧難の時代にも関わらず、敵兵への気遣いができる気質が今日の環境保全活動にも繋がっているように感じた。手漕ぎ体験で水鳥、野鳥のさえずりを聴きながら、ゆったりとした時間の流れを楽しめた。

お昼ごはんは、ここでしか味わえない美味しいびわ湖の伝統食「漁師料理」を食べながら、湖魚の味を堪能した。「モロコ、

ズラリと並んだ漁師料理。どれから食そうか？

「野洲市が抱える課題は…」右から福山雅治氏、佐々木和之氏

小鮎、ビワマス、海老豆、鮒寿司、近江野菜の天ぷら、シジミの味噌汁など」懐かしいおかずの数々。家族で食卓を囲んだ頃のお袋や親父・兄弟の笑い顔が浮かんできた。50年前は食卓が日々のサイクルとして、あたり前にあった。自分自身の暮らしのありようは、本当にこれで良いのか…、良くないだろう。びわ湖の自然環境を保全しながら、地元の食材を地域の住民が食べられる条件整備の再構築を急ぐ必要があると感じた。

◆びわ湖の水と地域環境保全への野洲市民の取組み（ミニフォーラム）

午後からは、佐々木和之さん（水色舎代表、滋賀県立大非常勤講師）のコーディネイトのもと講演会と意見交換会を行った。最初に「野洲市環境基本計画への取組みについて」と題し、福山雅治さん（野洲市環境課課長補佐）より、次いで「びわ湖と共に50年」と題し、松沢松治さん（びわ湖の水と地域の環境を守る会代表）より講演をいただいた。

野洲市環境基本計画が県内のみならず、他府県からも注目されている理由は、行政が作った計画ではなく、市民が環境について活動を必要とする課題を見つけていることにある。自分たちで実行できることは何かを考え、27のプロジェクトを作り、活動と実践が始まっている。個々の活動が行政、地域の企業・事業所との連携、協働で進められている点が特徴的だ。

平成19年にスタートした活動は5年を経過した。後半5年の取組みを始めるに当たり、中間見直しが行われ、課題の整理と若干の修正をした。

今後の取組み課題として、①活動の輪を市民、自治会、学校、事業所に広げ、連携を図っていくこと。②私たちの活動が目指しているものを明確にすること。③数値目標の設定や見える化活動の推進。④市民・自治会・学校・事業所相互が意見交換できる場づくりの必要性を指摘された。

❶グループ討議の発表　❷「面白い、楽しい、美味しい」発表　❸あやめ港で松沢松治氏　❹記念撮影「盛り沢山な1日でした」

松沢松治さんからは、びわ湖とともに漁師として歩んだ50年。びわ湖の水と地域の環境保全に取組んできたリーダーの熱い思いの一端を聴けた。松沢さんの話の中で、「びわ湖は年々きれいになっていると聞かされているが、毎日びわ湖で漁をしている漁師の認識は違う。びわ湖の水は今も年々悪くなっている」という言葉は印象的だった。これは行政、学識者の現状認識と現場の現状認識に大きなギャップがあることを示している。自然環境の維持、保全の難しさを考えるとき、現場の状態が把握できているだろうか？ それを怠ると誤った方向に導く危険性があることを示唆している。我々への警鐘のように感じられた。

最後に、本日の講演内容を受けて野洲の抱える課題についてグループ討議を行い、参加者で情報の共有化を図った。

◆研修会のまとめ

自然環境の維持、保全は10年、20年で解決できる問題ではない。次世代～次々世代に活動を引き継いでいくためには、コミュニティづくりが急務である。地域コミュニティが衰退している今、地域の人達をいかに活動に引き込んでいくのか。「面白い、楽しい、美味しい」をキーワードに、ファミリー層に興味と関心を持ってもらえる仕掛けづくりが必要だ。イベントや取組みの企画が求められる。まずは身の回りの小さな事から伝え、活動の輪を広げていくことが大切である。

滋賀県人の生活環境のバロメーターはびわ湖を診れば分かる。住みやすい住んでいて良かった、「びわ湖大好き」と声に出そう。びわ湖に対する「愛着と誇り」が醸成されていく喜びをビジョンにしよう。と、強く感じた研修会であった。

人財の森
環人ネット
近江環人

山暮らし子育て日記
作 オノミユキ
今回は、朽木に住む子ども達の自慢話をさせていただきます。
朽木の子は、本が好き。
よくよむ…
よくきく…
絵本の読み語りもしっかりと聞けるのだ！
それもそのはず…
フフフフ…
このグループのおかげなのだ!!
その名も朽木読み語りサークル「ほっとけーき」!!
メンバーは全員主婦！
オノミユキ
10年前に、朽木図書サロン(図書館)が開館したのを機に発足。
絵本をよむグループをつくりましょう
当時、ハイハイヨチヨチしていた子をテキトーに遊ばせながら
本読みの練習や
おはなし会の勉強会。
月に1〜2回、図書サロンでおはなし会を実演。
その内、保育園へおはなし会をしに行ったり
きょうは年中さんと年長さんへ
GO!
小学校へも出張したり。
きょうは山のむこうの学校や
べんとうもちで
GO!

約10名の「ほっとけーき」メンバーには、子育て真っ最中の主婦が多いので高度なことはなかなかできませんが、できる範囲内で頑張っています。最近は、ブックトーク(テーマに合わせて何冊もの本を紹介していくプログラム)やパネルシアター(お話に合わせて紙の人形をパネル上で動かす劇のようなもの)、小学校の図書室整理にも取り組んでいますが、無理なく楽しく、ということをモットーにしています。

朽木の子は、保育園の頃からおはなし会で絵本を聞く習慣が身についているからか、「朽木の子は絵本をしっかり聞けますね」という声がよく届き、私たちも嬉しくなります。

「ほっとけーき」発足当初は1歳だった長男。おはなし会では、脱走したりおはなしの邪魔をしたりして困らせてくれていましたが、それでも無理やりおはなし会に付き合わせたからか、11歳の今は本大好き少年です。

●本名加藤みゆき。人口17人の集落に住み3人の子育てに奮闘中。将来、家族で海外へ旅行するのが夢。

愛する風景

み仏の森

畑　裕子

イラスト：徳永 拓美

　近江通信紙（近江学フォーラム会報２０１３・０４）に福家俊彦氏のインタビューが載っていた。福家氏は天台寺門宗総本山三井寺執事長で近江学研究所客員研究員でもある。あまたの仕事に加えてあらたなプロジェクトを始められたという。そのプロジェクトとは「三井寺山内の杉・檜の人工林をもとの植生に戻そう」という取り組みである。

　「杉や檜の森林は木の実をつけないのでシカやイノシシなどの獣害をもたらしたり、また花粉症の原因になったりします。時間はかかりますが山林をたくさん保有する寺が、森林を本来の姿に戻すプロジェクトを率先する事に意義があると感じています」とある。何という英断だろう。私はしばらくぼんやりと木の実をいっぱいつけるブナや栗（くり）、椎（しい）、楢（なら）、栃（とち）の木の森を瞼に浮かべていた。

　田舎に育ち、小学生の頃、秋の山は大好きな遊び場だった。栗や椎の実を拾い、興じ、山中に落ちているウサギの糞を見つけては跡を辿り、ウサギの住みかを見つけようと遊び仲間と穴巡りをしたものだった。イノシシに出くわしたことはなかったが、タヌキやキツネを遠めに見た日には「カチカチ山」や「てぶくろ買いに」の絵本を読んでは名残を惜しんだ。

　み仏の森への思いはどんどんふくらんでいった。樹木の下に座り、瞑想する人々。そのかたわらを動物たちが通り過ぎて行く。この世の息苦しさから逃れ一時、この森に入ると安らかな境地になれる。迷いや煩悩や執着を断ち

切り、一切の苦や束縛から解き放たれる。もしかしてこれは悟りの境地に近いものかもしれない。

　とりとめない思いは宅急便の呼び鈴で現実に戻された。が、このプロジェクトは夢ではない。現（うつ）のものとして実行されていくのだ。素晴らしい計画である。それに花粉症の患者が少しでも減ることは大変ありがたい。またイノシシやシカの獣害が少なくなれば殺生の必要もなくなる。まさしく生きとし生けるものを大切にするみ仏の世界ではなかろうか。困難はあろうが、意義あるプロジェクトに諸手をあげて拍手したい。

　さらにインタビューには福家氏が猫好きであることが記されている。「大の猫好きなんです。今も一緒に寝ています」とある。私の頬は我が意を得たりと、緩くなっていく。恐れ多い三井寺の執事長に親近感を抱く。

　一昨年十五歳で亡くなった猫とは川の字で寝ていた。膝の上で命のともしびが消えていった感覚は今も忘れられない。以後、我が家には猫はいない。代わりに動物写真家の岩合光昭氏の「世界猫歩き」のテレビ番組のお世話になっている。世界の様々な場所で飼い猫もノラ猫も町の人たちとのふれあいの中でたくましく生き生きと暮らしている。

　私の空想癖はまたまた頭をもたげ、み仏の森は涅槃の森と化していく。いつか見たお寺の涅槃図。お釈迦さまが入滅された時、たくさんの人々と共に動物たちも馳せ参じ、悲しんでいる。十二支を中心にたくさんの動物たちが描かれていた。その中に猫がいたかどうか、記憶は定かではない。猫が不在ならぜひ猫もみ仏の森の仲間に入れていただきたい。

　人と動物、自然が共存するみ仏の森は癒しの森としていっそう発展していくことだろう。三井寺は来年、開山した智証大師円珍の生誕千二百年の記念年であるという。基幹事業として三井寺山内の文化財を収蔵する博物館兼収蔵庫を建設予定ということだ。

　み仏の森は人々にとって文化香る地であり、癒しの場であり、動物たちにとっても楽園となるだろう。森林を本来の姿に戻す、という一大プロジェクトの成就を心から願う一人である。

畑裕子

●はた ゆうこ＝1948年京都府生まれ。奈良女子大学文学部国文科卒業、京都で国語教師を勤める。その後、滋賀県に転居。1993年第5回朝日新人文学賞受賞、1994年第14回地上文学賞受賞、滋賀県文化奨励賞受賞。主な著書「画・変幻」「近江百人一首を歩く」「椰子の家」「近江戦国の女たち」など。日本ペンクラブ会員。

徳永拓美

●とくなが ひろみ＝1949年生まれ。日本画を学び、日春展、京展、新興展、滋賀県展に入選を経て挿絵も描く。「いぶきのやさぶろう」（京都新聞社）、「守山の野鳥ガイドブック」（守山市立教育研究所）、「甲賀のむかし話し」（サンライズ出版）、「イルカをおそった黒い波」（汐文社）など。レイカデイア大学「手作り紙芝居講座」講師。

鴨頭草（つきくさ）

三山　元暎

さし絵：中川 善雄

伊吹山を望むいつもの散歩道の草むらに、一群の露草（つゆくさ）が可憐な花を咲かせている。炎暑のころはいかにも生気を失った様子を見せていたが、ここ数日、朝露を含み、花の藍色がいっそうさえ、ぱっちり目を開いたように見える。

露草も露の
ちからの
花ひらく
　　　　龍太

陽が昇り、露が消えるころにはしぼんでしまう、はかない花である。

歳時記を開いて、露草の古名が「鴨頭草」だと知った。着物に摺りこんで染めたからこの名がついた。別名「ホタルグサ」とも呼ばれている。長く伸びたおしべの先の黄色が、ホタルの火のようだからついたという。

合併で米原市となったが、以前の山東町時代は、「鴨とホタル」が町のシンボルであった。この名がつく花というご縁もあって、なぜか親しみを覚える野の花である。

露草は古代から知られ、万葉集にも九首詠まれている。その中の一首。

鴨頭草に衣色（ころもいろ）どり
摺（す）らめども　移ろふ色と
いふが苦しさ

露草で着物を美しい青に染めようと思うけれど、変わりやすい色というのが苦しい。あなたの誘いを受け入れようと思うけれど、浮気っぽい人っていうのが気がかり…の意か。

世の中に移ろう情（こころ）をもつ人が多いのは、万葉時代も現代も変わらない。憎んだり、恨んだり、嘆いたり、心変わりする人の多さは、はかないこの世のならいのようだ。

三山元暎

●みやま もとあき＝1940年滋賀県坂田郡山東町（現・米原市）生まれ。長浜市の理事・経済部長を経て1995年8月から2005年2月まで山東町長。同月14日米原市誕生にともない退任。真宗大谷派真勝寺前住職。

悠々自適
中川善雄

●なかがわ よしお＝1936年生まれ。滋賀県展、長浜市展、伊吹を描く絵画展など入賞、入選歴多数あり。税理士。

本の紹介

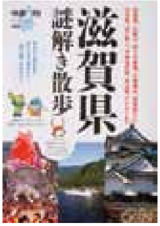
最近入手した、気になる本・CD・DVDをご紹介します。

BOOKS

みんなではじめる 低エネルギー社会のつくり方

●著者／大久保泰邦
●監修／石井吉徳
●発行／合同出版
●価格／1500円＋税
●内容／日本のエネルギー問題を解決する15のポイントを紹介。石油生産量が減りはじめている今、原子力で日本のエネルギーをまかなうなら270基の原発が必要。もはや、エネルギー消費そのものを減らす以外に方法はない。

滋賀県謎解き散歩

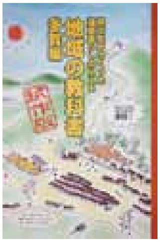


●編著／中井均
●発行／中経出版
●価格／857円＋税
●内容／悠久の歴史・豊かな自然。渡来人や「三方よし」の近江商人が活躍し、「日本の回廊」として西日本と東日本を結ぶ滋賀県の魅力を知る旅にでかけよう！

琵琶湖周辺の山を歩く

●著者／長宗清司
●発行／サンライズ出版
●価格／1800円＋税
●内容／目標を目指し達成するだけでも登山の妙味はある。地形図とコンパスだけで探索した、山歩きのためのガイドブック。

県大生がつくった湖東暮らしのススメ 地域の教科書多賀編 試作版



●編集／たがタウンプロジェクト（TTP）
●発行／湖東移住・交流プラットフォーム『地域の教科書』部会
●内容／滋賀県立大学のTTP学生メンバーが取材・編集を担当。多賀の魅力が満載のフリー冊子。

しがひとめぐり

●発行／びわこビジターズビューロー
●制作／NOTCH
●内容／湖国の今を生きる人々に出会う旅。東西南北の地域ごとに湖国の魅力を紹介するフリー冊子。

おかげ山物語

●編集／毛利浄香、大岡千紘
●編集協力／中村杏里
●内容／京都造形芸術大学に通う学生2名の卒業制作をまとめた一冊。滋賀県の棚田で無農薬のお米を育て、その過程から得たエピソードを紹介する。「おかげ山」は「おかげさま」に由来。

武田邦彦の本当は教えたくない アガらず話す方法

●著者／武田邦彦
●発行／遊タイム出版
●価格／1200円＋税
●内容／多数メディアで活躍中の武田氏は、かつて〝アガリ症〟だった!?「人前で思いのままに話すコツ」を伝授。

インターナショナルメッセージ　―独逸

しなやか？

原　修子

暴風雨。稲妻が光り、雷が鳴り、雨が、あるいは雹（ひょう）（時には拳大の）が降る。

突然に襲う集中豪雨的雷雨。木々の枝が折れたり、倒れたり、地下室浸水、道路冠水などの被害がでる。年々ドイツで増えて来ている気象だ。

ドイツには「Natur rächt sich（自然は復讐する）」という言葉がある。意味するところは説明の必要も無いであろう。

「ニャーン、ニャーン」。大好きな遊び道具を投げてと催促する声。投げてやると追いかけて行き、口にくわえて戻ってくる。そして「また投げて」と期待に満ちた顔で見る。教えられたわけでもない、躾けられたわけでもない。何時の日にか自分で発見したお遊び。「お前、何時から犬になったの？」と尋ねても返事はしてくれないし、もちろん「ワンワンと吠えて」と言っても「？」という表情で見返される、「猫は猫」と。

進歩という名の下に、進歩は良い事だと信じている人々によって、世界が大きく変えられて来た。それにより得た利益は限りなく多い。

日常生活を考えるだけでも、それはわかる。しかしその過程で忘れられ、失われていくものがあるということには気付かなかった、あるいは気付きたくなかった。もしかして気付いても、新しい対策（進歩）でそれを克服出来ると信じている、イヤ、信じたい。

常に未知を探求し、納得出来る説明を得たいという知的欲望。それが人間の本性にあるのかもしれない。しかし同時に理性、倫理を持っているのも人間であろう。そしてその理性や倫理は、境界線を知らしめ、そしてそれを超えないようにブレーキをかける。もし超えてしまったという認識を得たら、どうしてそうなってしまったのか、そのような事が再び生じないためにはどうすればよいのかという、知的欲望を引き起こすものではないだろうか？

自分から望んだのではないものの飼い猫となってしまったという環境。それに応じて、犬のような遊びを自分で見いだしたりしているが、猫の本能は失わない。何が大切なのか、本能を失っていない。譲れないものは持っている。それを〝根〟に、環境に対応して生きている。

動物の本能だからと言われるかもしれない。しかし人間も動物だ。何が大切か、譲れないか。それを〝根〟に生きて行く。

「しなやかだな〜」と思う。

原修子

●はら しゅうこ＝徳島市出身。1972年よりドイツアウグスブルク市在住。國學院大学文学部哲学科及びアウグスブルク大学カトリック神学科卒業。職業、通訳。翻訳。

♪第7回 MOHせんりゅうコンテスト 2013♪

第7回M·O·Hせんりゅうコンテストの候補作が決定しました。10月24日(木)～26日(土)に長浜ドームで開催される「びわ湖環境ビジネスメッセ 2013」の弊社ブースで、皆様に投票していただきベスト3を決定します。投票に参加してくださった方には、ステキなプレゼントが…。ふるってご来場ください。

♪コンテスト候補作♪

- ありがとう　思える気持ち　大切に
- おかげさま　昔があって　今がある
- 手をあわす　毎日感謝　おかげさま
- ごみ一つ　地球の寿命　また減った
- ほどほどに　親のする事　子がまねる
- 生活の　意識を変える　「おかげさま」
- もったいない　その心で　また太る
- ほどほどに　それができれば　痩せられる
- 何もかも　欲しい気持ちは　ほどほどに
- 子の巣立ち　多くの人の　おかげさま

♪M·O·Hせんりゅうコンテストって？♪

社会倫理の浸透を目的とし、せんりゅうを通して「もったいない·おかげさま·ほどほどに」を考えるきっかけづくりをしています。今年も読者の方から100を超えるせんりゅうが集まり、ベスト10選出には弊社の社員と執筆者懇談会から137名の協力を得ました。

社内投票の集計風景

講演日記

皆様のご支援でたくさんの講演依頼を頂きました。6月～9月の講演をダイジェスト版でお知らせします。

NPO法人もったいない学会　第一回評議会

- 日時：6月6日
- 主催：もったいない学会
- 演題：「地域交流誌が導く地域の未来」
- 講師：辻村 琴美
- 会場：東京大学本郷キャンパス山上会館
- 対象：会員
- 参加人数：20人
- 内容：石油ピークを啓蒙し脱浪費社会をめざすもったいない学会。10周年を迎えるM・O・H活動を東京の地で発信した。

記者講座

- 日時：6月14日
- 主催：富士通株式会社
- 演題：「やさしくふかくおもしろく」
- 講師：辻村 耕司・辻村琴美
- 会場：県内小学校
- 対象：小学5年生
- 参加人数：56人×2組
- 内容：初の小学生対象となる記者講座。前半に写真の選び方、後半にタイトルの付け方を伝えた。子どもたちの真剣に取り組む姿に感銘を受けた。

センコー株式会社総会

- 日時：6月21日
- 主催：センコー株式会社
- 演題：「中小企業にしかできない持続可能社会の企業経営」
- 講師：森 建司
- 会場：琵琶湖ホテル
- 対象：関係者
- 参加人数：70人
- 内容：持続可能社会は自立型地域経済から生まれる。人の絆で生まれる「商い」の喜び、消費者と生産者が生み出す「幸せ経済社会」について話した。

経営者モーニングセミナー

- 日時：6月22日
- 主催：滋賀県倫理法人会・彦根市倫理法人会
- 演題：「ひまからでたまこと」
- 講師：辻村 琴美
- 会場：彦根キャッスルホテル
- 対象：会員
- 参加人数：35人
- 内容：朝6時から始まるモーニングセミナー。朝型の生活習慣を体得するとともに、会員同士の交流・情報交換の場となる。編集長辻村の生き方そのものに注目が集まった。

執筆者懇談会32

- 日時：6月26日
- 主催：弊誌
- 場所：大津グリル
- 参加人数：9人
- 内容：41号『しなやかでいこう!』の特集を決定、42号『ほほえみで昭和の暮らし』の内容を検討。

女性中央会しなや華塾

- 日時：7月2日
- 主催：しが女性中央会
- 演題：「女性がにぎる地域経済」、「M・O・H

通信の進化」
●講師：森 建司・辻村 琴美
●会場：新江州eプラザ
●対象：会員
●参加人数：19人
●内容：前半は森代表が、女性の変革に対応するしなやかさ、感性でつかむ商機への期待を話し、後半に編集長辻村がM・O・H活動を紹介。弊社の「情報館eプラザ」も見学していただいた。

滋賀県立大学 市民参加論

●日時：7月5日
●演題：「編集・取材を通して高める人間性」
●講師：辻村 琴美
●日時：7月12日
●演題：「続可能社会の市民参加」
●講師：森 建司
●会場：滋賀県立大学
●対象：学生
●参加人数：40人
●内容：2週に亘る講演。森代表の講演の際には編集長が牛の姿になって登場！

環人ネット総会

●日時：7月27日
●主催：NPO法人環人ネット
●演題：「事業規模3億円のNPOはこうつくる！」
●講師：NPO宮崎文化本舗・石田達也理事長
●会場：滋賀県立大学地域共生センター
●対象：会員
●参加人数：60人

アグリビジネスカフェ

●日時：8月29日
●主催：バイオビジネス創出研究会
●座長：森 建司
●会場：長浜バイオ大学
●対象：会員
●参加人数：30人
●内容：農業は本来どうあるべきなのか、「フクハラファーム」代表取締役・福原昭一氏による講演が行われ、森が座長を務めた。

マザーレイクフォーラム びわコミ会議（第3回）

●日時：8月31日
●主催：マザーレイクフォーラム運営委員会
●演題：「びわ湖の環」
●ファシリテーター：辻村 琴美
●記録：上岡 瞳
●会場：コラボしが21

近江歴史回廊大学講座

●日時：9月7日
●主催：滋賀県文化振興事業団
●演題：「『いまどきの寺社』見聞」
●講師：辻村 琴美
●会場：大津市勤労福祉センター
●対象：受講生

講演スケジュール

10月からの講演予定です。

ミニセミナー

●日時：10月
●主催：滋賀GPN
●演題：「環境と食」
●告知：よばれやんせ湖北（上岡 瞳）
●会場：びわ湖環境ビジネスメッセ会場内

ふるさとつながりたい

●日時：10月22〜24日
●主催：丹波市全国中山間地ニューツーリズム・ジャンボリー実行委員会
●演題：「新・日本のふるさと風景」
●話題提供：辻村 琴美
●会場：丹波ライフピアいちじまほか

「太陽生命くつきの森林（もり）」元気な森林づくり進行中！

太陽生命だより

❶ 毎年たくさんの社員が集い、森林づくりを進めています　❷❸ 地元小学生による「どんぐりプロジェクト」（どんぐり拾い、植付け）　❹ アカマツ林での落ち葉掻き　❺ トチノキの植樹　❻ ビオトープ整備

太陽生命は、平成19年から森林公園くつきの森にある旧里山林で森林づくりを行っています。毎年たくさんの社員が参加してアカマツ林での落ち葉掻き、栃餅の原料となるトチノキの森林の造成やビオトープ整備など多彩な活動を展開しているほか、地元小学生とどんぐりから広葉樹を育てる「どんぐりプロジェクト」を実施しています。新しい形で人とかかわる元気な森林づくりを目指しています。

　太陽生命は今年創業120周年を迎えました。わたしたちの命を支えてくれている森林に感謝し、これからもたくさんの方々にそのすばらしさを感じていただけるよう整備を進めてまいります。

●「太陽生命くつきの森林」とは

太陽生命は平成19年11月にNPO法人麻生里山センターと「琵琶湖高島森林づくりパートナー協定書」を締結し、森林公園くつきの森の一角12.7haにおいて森林整備活動を展開しています。

M・O・Hせんりゅう

能登川南小学校5年生の皆さんの作品です。

♪ベルマーク　ためていいもの　クルマイス
井手　拓馬

♪エアコンを　つけっぱなしは　もったいない
山本　ゆりあ

♪もったいない　そんなにいいの　エアコンが
円城　歩麦

♪もったいない　それすてないで　使えるよ
河本　花奈

♪ベルマーク　ためていいもの　クルマイス
井手　拓馬

♪おかげさま　つなぐ緑は　心をつなぐ
辻村　明憲

♪もったいない　でんきのあそび　やめようね
鎌倉　遼

♪そのかみは　まだつかえるよ　もったいない
小南　りの

♪おかげさま　エコいっぱいで　幸せだ
田井中　こうや

♪ありがとう　みんなの力　おかげさま
小林　りゅうき

♪もったいない　水の出しすぎ　きをつける
す田　ひ菜

♪もったいない　だいじなみずの　だしっぱなし
吉岡　尊斗

♪もったいない　いま使ってる電気　消しましょう
寺井　しゅうせい

♪すいどうも　電気のつけっぱ　もったいない
濱野　佑樹

♪もったいない　出しっぱなしだ　その水道
秋山　聡美

♪もったいない　使える物は　捨てないで
福永　百々日

♪電気つけ　つけっぱなしは　ほどほどに
安食　加葉

♪もったいない　まだつかえるよ　かみくずも
矢川

♪もももももも　もったいないよ　もももももも
大辻　悠生

♪もったいない　つかえるものは　つかおうよ
冨江　理紗

♪ベルマーク　ためていいけど　ほどほどに
松村　たか人

♪もったいない　電気を消して　外遊び
田井中　伊吹

♪人と人　その言葉で　ほどほどに
深谷　和史

♪エコしよう　もったいないこと　しないでね
川原﨑　菜月

♪もったいない　つけっぱなしは　よくないよ
箭野　詩奈

♪もったいない　エコをしようよ　南小
匿名

♪おかげさまで　夫婦ともども　幸せに
渡辺　りょう

♪もったいない　そんな生活　やめようね
和田　帆夏

♪クーラーに　つめたいアイス　ほどほどに
山田　ましろ

♪使えるよ　紙の切れはし　もったいない
大塚　亮弥

♪もったいない　もっとたべよう　モーモーモー
河合　真弥

♪ほとけさま　おかげさまで　幸せです
田中　らんらん

♪ありがとう　50 周年　おかげさま
上村　洸翔

♪がんばろう　ニホンをまもる　おかげさま
しば原　そう大

♪もったいない　もっと食べたい　ぶたになる
尾川　智哉

♪おかげさま　つくったやさい　ありがとう
本庄　菜々美

♪もったいない　ごはんをのこし　ばちあたる
小松　優希音

♪電気、水　だしっぱなしは　もったいない
井口　真緒

♪人どうし　けんかするのも　ほどほどに
松岡　花音

♪もったいない　給食のこせば　ざんぱん行き
山本　舜祉

♪毎日の　ごはん三杯　ほどほどに
小泉　嵐

♪たすけあい　かわす言葉は　ありがとう
白根　拓実

♪せんりゅうで　みんなの笑顔　見つけよう
園田　稔真

♪一時でも　生きてることに　感謝しよう
川原　日向和

♪友けんか　たたかうのは　ほどほどに
田井中　ひまり

♪「ありがとう」　笑顔をつなぐ　合言葉
辻本　萌

なでしこファーマーズ
食hana咲かそうよ

Nadeshiko Farmers

「なでしこファーマーズ」が発足しました！

「なでしこファーマーズ」では、滋賀県の女性農業起業者を始めとして農業や林業や漁業に携わる人々とそれらを支える事業に携わる人や事業者のゆるやかなネットワーク「なでしこ滋賀ネット」づくりに取り組みます。事業者間の交流会や、勉強会などを行います。キーワードは「食hana！」。

日々の暮らしを支える"食"は、産物や自然に向き合って食品を作り出す人たちがいてこそ成り立ちます。真摯に良いものを作る、そんな農業、林業、漁業などの一次産業がいかに豊かで元気で次の世代へと続いて行くか。そしてその延長に、わたしたち一人一人の暮らしが本当に豊かであることに繋がります。

「食について話しましょう！」恋バナならぬ「食hana」を咲かせませんか?

◆活動予定　※検討段階のものを含み、変更する可能性があります

《交流会の実施》

- 第1回　9月26日（木）13時00分～15時30分
  場所：ローザンベリー多和田（滋賀県米原市多和田605－10）
  内容：研修(1)講師からの農業の未来に関する講演
  研修(2)グループワーク：次世代に「遺(のこ)すもの」「遺せないもの」を語ろう！
- 第2回　11月26日（火）時間未定
  場所：成安造形大学 カフェテリア「結」
- 第3回　2014年2月15日（土）
  場所：セトレマリーナびわ湖

《参加申込方法》

下記「なでしこファーマーズ事務局」へ　住所・氏名（ご所属）・連絡先をご連絡ください

◆活動情報掲載ページ

http://mushimega.net/nadeshiko.htm

◆賛助会員募集！

老若男女、個人団体問わず、活動をご支援いただける賛助会員を募集します。

- 条件：活動へご関心・ご共感を持っていただき、会の活動にご参加いただける方
- 会費：年間3,000円／口（複数口の納入が可能です）

下記へご連絡ください。詳細を追ってご連絡差し上げます。

なでしこファーマーズ　事務局　北井香（NPO法人木野環境）
k-kaori@kino-eco.or.jp　または　TEL：075-708-8061
〒600-8085　京都府京都市下京区葛籠屋町515-1

イベント紹介

第3回 よばれやんせ湖北 生産者・消費者交流会

地産地消していますか？

湖の幸
山の幸
里の幸が
勢ぞろい！

2013年11月17日(日)
定　員：100名（事前申込・先着順）
参加費：2,500円
時　間：10:30〜14:30頃（受付10:00〜）
場　所：長浜バイオ大学 食堂（長浜市田村町1266）
JR北陸本線「田村」駅下車すぐ

味わう
湖北地域で心を込めて作られた品物
ビワマス、シカ肉、郷土料理…をいただきます

思いを聞く
ゲストスピーカーからのエールを伺います
嘉田由紀子氏（滋賀県知事）
松島三兒氏（長浜バイオ大学）
成田賀寿代氏（こだわり滋賀ネットワークスーパーバイザー）

つなぐ
生産者のこだわりを聞き、
交流の場をつくります

支える
みんなで地産品を支えるきっかけが生まれます
「生産者のみなさんの熱意が感じられました」
「近江発の日本に誇れるフォーラムですね」
「心を込めて品物を作られているのが伝わってきました」
（第2回参加者アンケートより）

公式Blogで
随時情報公開中！
http://yobareyanse.shiga-saku.net/

お申し込み・お問い合わせ先
【事務局】NPO法人木野環境（担当：北井）
〒600-8085　京都市下京区葛籠屋町515-1
TEL:075-708-8061　FAX:075-708-8062　mail:oubo@kino-eco.or.jp
長浜市農政課　TEL:0749-65-6522

［主催］よばれやんせ湖北実行委員会
〔よばれやんせ湖北実行委員会組織構成〕
長浜み〜な編集室,（株）冨久や、（特非）環人ネット、（株）ロハス余呉、（特非）木野環境、M･O･H通信
［後援］長浜市／［協力］長浜バイオ大学、（一社）バイオビジネス創出研究会、長浜地方卸売市場（株）、朝日漁業組合、（株）びわ鮎センター、滋賀咲くブログ、新江州（株）、パイン（株）
※当会は長浜市市民活動団体支援事業の助成を受けて実施しています。

happy M・O・H通信が学術雑誌に!!! LOCAL ENVIROMENT Vol17

イギリスで滋賀のネットワーク分析調査をされていた日下部笑美子さんから、学術雑誌『ローカル・エンバイロンメント』が届きました。同誌は持続可能な発展、また公共政策の分野で権威のある雑誌です。「滋賀の持続可能な地域づくり」に貢献する方々のアンケートで、55プロジェクト中15位（P1057）に入れていただきました。影響を与える人相関図には、長浜市でMとT（P1053）を記載していただいています。光栄です。

eat あなたと探す 美味しい琵琶湖八珍 安土城考古博物館

滋賀県立安土城考古博物館は、夏季特別展「華麗なる漁と美味なる食」を開催しました。琵琶湖の魚を食すということは、琵琶湖の水環境と琵琶湖の水文化を次世代に伝えるということを185種の魚料理で表現しました。あなたが選ぶ湖魚料理コンテストも開催されました。

festival よばれやんせ湖北が出店 湖北やんすこんす 市民祭2013

藤井市長も来店

ビワマスキャラクター「鱒田さん」も登場

一般社団法人長浜青年会議所が主催する、「湖北やんすこんす市民祭2013」によばれやんせが出店しました。出会いに感謝みんなで奏でるハーモニーのタイトルで、吹奏楽部の演奏が賑やかでした。

It was found. ペットボトルで野菜が作れる!「ペットマトシリーズ」がすごい!

「ペットマトシリーズ」は、トマトや枝豆、ペパーミントといった野菜やハーブを、ペットボトルで簡単に楽しく栽培できるキットです。土を使わない完全水耕栽培で、室内園芸に最適！　野菜とハーブの種類も幅広く、ワンコイン（定価500円）で買えるのも魅力的です。お部屋で野菜栽培、始めませんか？

start 美のしが語り部 マイ★スター養成講座 始まる

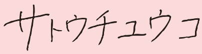
滋賀県総合政策部「美の滋賀」発信推進室が主催する、「美の滋賀」地域づくりモデル事業企画提案公募で、９事業が採択された。“美のしが語り部マイ★スター養成講座”（コミュニテイ・アーキテクトネットワーク環人ネット）も仲間入り。10月27日～来年３月まで。連絡は075-708-8061。

●パラパラマンガ作家紹介●

本誌の左下と右下をパラパラして下さい。
何かが動きます。若手作家の力作です。

●しおん
（左ページ）
郷内ユウコの腰巾着。漫画やイラストの創作を中心に活動中。

「おなかいっぱい」
食欲の秋をイメージして作成しました。暖かみのある色を中心に着色したので、雰囲気だけでも秋っぽさを感じてほしいです。



●郷内ユウコ
（右ページ）
しおんの友人。色鉛筆が好きで、マンガやイラストなどを作成している。

「月見ウサギ」
月を見て、故郷を懐かしんだり美しさに見とれたり、様々かなぁと思いながら作成しました。

congratu-lation-1

部活食で甲子園 彦根東高校初出場

本誌36号（2012/06/20「大学×企業で食文化」）で紹介した、立命館大学スポーツ健康科学部教授で公認スポーツ栄養士の海老久美子さんと、株式会社冨久や代表取締役の金森弘和さんが二人三脚で指導した「部活食」。このほど彦根東高等学校野球部が、甲子園出場を果たしました。ごはんを中心にしたバリエーション豊かなメニューで食べ手と作り手が近い距離を実現した成果です。選手たちの筋力アップやメンタルの強化に、“食”は大きな要素を占めることが実践で証明されました。おめでとうございます。

congratu-lation-2

「廃棄物バスターズ」世界へ 社会貢献コンペ優勝

本誌27号（2010/3/10「地元産の廃プラで湖国に花を」）で紹介した、滋賀県立大学「廃棄物バスターズ」（教授 徳満勝久指導）が、全国大学生の社会貢献ビジネスコンペで再生プランターのリース事業を発表し優勝しました。37カ国代表が出場する世界大会は9月29日からメキシコ・カンクン市で行われます。障害者作業所との連携が評価されました。おめでとうございます。

congratu-lation-3

ウッディパル余呉前川氏 「人間力大賞・奨励賞」受賞

ウッディパル余呉の支配人、前川和彦氏が、7月13日に日本青年会議所近畿地区協議会が主催する「第３回近畿地区版人間力大賞」にて奨励賞を受賞され、賞状とたてを授与されました。おめでとうございます。

precious

カスミサンショウウオが ハヤブサが…

株式会社ダイフク滋賀事業所では、DAIFUKU “結い” プロジェクトを展開中です。広大で豊かな緑地には、カスミサンショウウオやハヤブサが生息します。生きもの調査を進めるうえで、生物多様性保全の取り組みを展開されています。『環境かわら版その壱（2013/05/0）』には、～みんなで進める保全活動～を紹介しています。

環境かわら版

thank you

パインアメが届きました

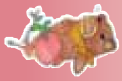
本誌24号（2009/05/31「パインの力」）で紹介した、パイン株式会社からパインアメが今年も届きました。甘酸っぱく、懐かしい味わいが夏の暑さを忘れさせてくれました。M・O・Hせんりゅうの絞り込み作業中ということもあり、協力いただいたみなさまへのお礼として配布させていただきました。これからイベントが目白押し、弊誌の関係するイベントには、パインアメのご奉仕がありますので、お楽しみに。上田豊社長様はじめパイン株式会社様にお礼申し上げます。

パインアメを持つ女子

surprised

ビワマンゴーが特産 温暖化は現実だ

高級果実マンゴーを近江八幡市安土町の農事法人組合内野営農組合が試験栽培し「ビワマンゴー」の名で出荷しています。小型ハウスで育てています。好物なだけに（私が）滋賀のブランドに育つといいな。補助金に頼らない高収益作物として期待されます。とはいえ、地球は確実に温暖化しています。滋賀でマンゴー栽培とは…。



「循環型社会を目指す～M·O·H通信～」の発行に当たって

代表　森 建司

20世紀型社会は経済至上主義の時代であった。科学技術の進歩とそれに伴う工業や流通の発展は、世界的なスケールで人々に物による恩恵をもたらしたが、同時にバランスのとれた自然との共生社会を破壊した。経済至上主義とは物の豊かさを最高の幸せとして捉え、その対極にあるものの価値をほとんど消し去ろうとするものである。人々の価値観を情報操作で画一化して、特定のものに集中させようとするマーケット戦略は個人の人生観、社会観にまで侵入し、その独自性、不可侵性まで奪って行った。このことによって人々は哲学的な意味の自己をなくしてしまった。

今こそ新しい時代として循環型社会を作ろうとしているわれわれは、自己を証明する心とか思いを取り戻さなければならない。死生観や人生観、先祖や子孫、生涯をかける志、自己を自己らしく生き抜くための人生哲学など。そしてそれは自然との共生社会を目指すものであり、人としての真の生き様を問うものであらねばならない。

この実現のために

「循環型社会を目指す～M·O·H通信～」を発行する。

《 M·O·H通信概要 》

■目的

（1）循環型社会構築に向けた意識改革

（2）浪費型社会通念の脱却

（3）人生哲学を学ぶ

■事業

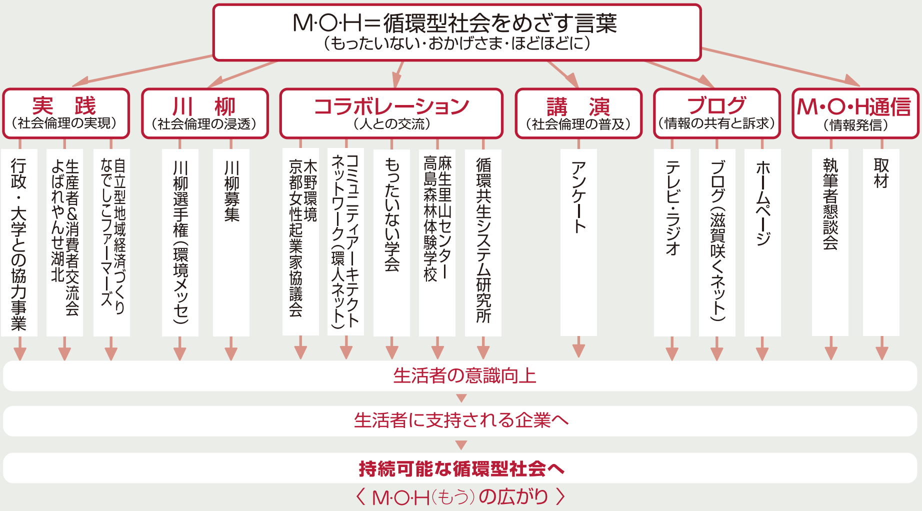
（1）通信の発行及び出版

（2）講演会、勉強会、シンポジウムなどイベントの開催

■事務局

〒526-0111
滋賀県長浜市
川道町759−3
循環型社会システム研究所
TEL.0749-72-5277
FAX.0749-72-8681
e-mail:tsujimura@shingoshu.co.jp
代表:森 建司
担当:つじむら ことみ
上岡 瞳

[M·O·Hコンセプトシート]



読者の声

★先日は会社見学、誠にありがとうございました。草野社長のお話を聞いて、もっとたくさん聞きたくなりました。
日比野 春美

★直接利益にならない事を支援できる懐の深さ、益々発展し続ける会社ですね。
彦根市 小林 秀行

★森さんと大川先生の対談、繰り返し読みました。特に希望を持てる社会、夢を持てる社会、睡眠と認知症の関係、如何に睡眠が大切かが判りました。
古河市 菅野 ハルヨ

★私自身が、週末農業をしていますので通信のコンセプトに共感しつつ拝読しております。
岡本 正志

★なかなか読み応えのある一冊で、特に愛農高校の記事が心に残りました。
守山市 岸本 倫代

★愛農学園と、北海道江別市にある酪農学園との思いがけない共通性に驚きました。創立者の黒澤は酪農民のための会社「雪印」を作り、酪農学園を作ったと言われています。「農民道」という考えも、どこか似ているなと思いました。
愛知郡 外川 昇邦

★40号のミツカン水の文化センターの後藤喜晃は私の息子です。お世話になりました。
長浜市 後藤 喜三

★大津ウォークに関して、大津祭曳山展示館の近くに母の実家があり、御兄弟が桃山というからくり人形で有名な山で鐘を鳴らしたり笛を吹いておりました。
河内長野市 太田 雄久

★末ページの『循環型社会を目指す～M・O・H通信～』の発行に当たって」が心に残りました。
長浜市 下浦 一宏

★自然と科学のバランスの良い社会にどんどんなるといいですね。
彦根市 田中 絹子

★〝森のようちえん〟ステキですね。こういう取り組みをなさっている方がいらっしゃるの、知りませんでした。園児になりたい感じ!! 豊かな感性の子たちが育っていくのでしょうね。
西宮市 西本 椰枝

★7月2日の研修会では大変お世話になりました。経営者として地域経済に参画する女性経営者にとって、商品やサービスを身近に循環することで地域に生かされ生きていくことを実感する貴重なお話をうかがい、大変勉強になりました。
しが中小企業女性中央会

★滋賀GPNの総会でご縁を頂戴しましたこと、大変嬉しく思っております。
大津市 増田 由美子

他、多くの声をお寄せいただきありがとうございます。

《次号予定》2013年12月発行予定

■特集:「ほほえみで昭和の暮らし」

●M・O・Hな人／「かっぱの本」NPO法人芹川　川﨑敦子

●対談／「アミタグループの挑戦」㈱アミタ持続可能経済研究所 代表熊野英介＋森建司

●取材／「芹谷ダムに沈みそうになった村」

●寄稿／「ありがとうさようなら」建築家大岩剛一

●寄稿／「田ね庵ができるまで」押谷友之

●取材／よばれやんせ湖北、食hana咲かそうよ

ほか

●連載／通常通り

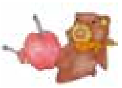
※敬称略、予告なく変更いたします

編集後記

★ぎょ、ギョ。ぎょ、ギョ、魚　＜(ＯＯ)＞
おもわず手にした。「あーあっつう～」。とりあえずビールじゃなくて、アイス、愛す。さて、我が家の冷蔵庫にはどんなアイスが待ってるかな?「オープン ザ プライス」違うって「オープン ザ ドア」。ガチャ、ヒュー一一一。ギョ、ギョ、ギョ、上からなんか降ってきたあ一一。思わず手が出る、足が出る～、つかんだ。〝ぐにょ〟「えっツ!」何?? この感触?? 怖いけど…ソッとみて見る、左手を…。「ぎょ、ぎょ、魚、焼きサンマ!」「秋ですネエ」って違うって。こわあ～、焼きサンマが降ってくるって、どうゆこと? と、そこに一人のおばあが「こもがつかみよるから、上に乗した」って、冷蔵庫の上に乗せるか?ふつう。「よう届いたネエ」……（こと）

★たおやかで、太くまっすぐ生きる。そんな人生を歩む大先輩が周りにたくさんおられます。目標となる人が周りにいるこの環境は、本当に幸せだなあ。（ひとみ）

★四国で歩き遍路の5日間。一人でただひたすら歩いて見えた人の温かさ、自然の厳しさ美しさ。すべてに感謝。……（あや）



《M·O·H通信》受付中！

あなたも「M·O·H通信」を読んでみませんか。特典として、M·O·H通信、講演会のご案内をいたします。あなたの活動やこの通信についての、ご意見もお聞かせください。

お名前、年齢、郵便番号、住所、電話番号、fax（あれば）、e-mailアドレス（あれば）、心に残った一言をご記入の上、お申し込みください。通信をお送りします。申込書をfax、郵送、mailでお送りください。

《M·O·H通信》申込書　FAX 0749-72-8681

フリガナ		年齢	希望冊数
お名前			
住　所	〒		

電　話	FAX	メールアドレス

あなたの心に残った一言、MOH川柳をお書きください。

※記入いただいた内容については、目的以外のことに使用または転用はいたしません。

キリトリ線

M·O·H通信　Vol.41（通巻42号）2013年9月20日発行　発行部数7,300部

●編集·発行/新江州(株)
循環型社会システム研究所
M·O·H通信編集局

代　表　森 建司
編集長　つじむら ことみ
編　集　上岡 瞳
取　材　山崎 彩
デザイン　伊達デザイン室
写　真　辻村写真事務所
　　　　平田 尚加
印　刷　プランセル
ホームページ　プランセル

●創刊/2003年3月度

●執筆者懇談会
内藤 正明　今関 信子
海東 英和　堤 幸一
山田 朝夫　進 ひろこ
下西 康嗣　中村 誠
末永 國紀　笹山 千怜
花田 眞理子　結城 美枝子
弘中 史子　松崎 和弘
畑 裕子　井上 昌幸
山崎 隆　辻村 耕司
三山 元暎　佐々木 洋一
加藤 みゆき　徳永 拓美
清水 安治　山口 美知子
檀上 俊雄　岡部 達平
森 孝之　豊田 一美
堀越 昌子
（順不同·敬称略）

●ご協力
滋賀県
琵琶湖環境科学研究C
もったいない学会
循環共生社会S研究所
高島森林体験学校
麻生里山センター
滋賀県立大学
近江環人 地域再生学座
NPO法人環人ネット
野洲生活学校
EEネット
中小企業家同友会
（順不同）

●支援
新江州(株)
〒526-0111 滋賀県長浜市川道町759-3
TEL.0749-72-5277　FAX.0749-72-8681
★ブログ★
http://moh.shiga-saku.net/
★ホームページ★
http://www.mohmoh.jp/
MOH図書館　検索

※記事中での写真·本文につきましては、無断転載を禁じます。

START